〈スタッフ〉

原作　ホメロス

演出　栗山民也

脚本　木内宏昌

音楽　金子飛鳥

美術　伊藤雅子
照明　勝柴次朗
音響　山本浩一
衣裳　前田文子
ヘアメイク　鎌田直樹
歌唱指導　伊藤和美
振付　田井中智子
殺陣　渥美博
演出助手　豊田めぐみ
舞台監督　加藤高

宣伝　ディップス・プラネット

宣伝写真　渟　忠之

宣伝美術　柳沼博雅

制作　神戸丈志

稲毛明子

企画　パソナグループ

ヴィーブル

製作

テレビ朝日
産経新聞社
パソナグループ
サンライズプロモーション東京

【東京公演主催】

テレビ朝日
産経新聞社
パソナグループ
サンライズプロモーション東京

【新潟公演主催】

新潟市芸術文化振興財団
UX新潟テレビ21

【兵庫公演主催】

兵庫県
兵庫県立芸術文化センター
関西テレビ放送
キョードー大阪

第一幕

プロローグ

カサンドラとコロスたちによる。

カサンドラ　三〇〇〇年前、「トロイの木馬」で終わったあの戦争。
コロス　戦争はまだ続いてる。
カサンドラ　ギリシアとトロイアの十年戦争。
コロス　戦いは終わらない。
カサンドラ　あれはすべての戦争の物語。
コロス　争いを忘れた時代は一度もない。
カサンドラ　あの戦争が時と場所を超え、
コロス　人種と戦利品を変え、
カサンドラ　いまもずっと続いている。
コロス　……戦えという声がする。

カサンドラ　誰も戦場を捨て去れない。
コロス　……戦えという声がする。
カサンドラ　戦場の炎で命を燃やす。
コロス　……戦えという声がする。
カサンドラ　戦場に栄光を求める。
コロス　……戦え。
カサンドラ　その声にとりつかれている。
コロス　……戦え。
カサンドラ　その声に導かれている。
コロス　……戦え。
カサンドラ　かつてトロイアの平原で、
英雄アキレウスに聞こえたのと同じ声。
コロス　……戦え。
カサンドラ　さあ、女神たちよ、怒りを歌え。

アキレウスの怒りを語り、
物語へ導いて。

コロス　『イリアス』へ！

カサンドラ　すべての戦争の物語へ！

（歌）

コロス　トロイアの土　乾いた土
兵士の足音　鎧の音
敵の赤い血　味方の血
吸い込んで　風に舞って
乾いてゆく　トロイアの土
風　土
赤い血
乾いて

消えて

カサンドラ　人は　なぜに　戦う

怒り　栄光　運命

人は　なぜに　戦う

怒り　栄光　運命

第1場　『屈辱』

ギリシア連合軍とトロイア軍による、
十年戦争の十年目。
ギリシア連合軍の船陣。千艘の黒船からなる要塞。
トロイアの守護神アポロンが銀の弓を鳴り響かせ、
疫病となってギリシア連合軍の兵士たちを襲っている。
その十日目。
総大将アガメムノンを中心に、
武将たちの会議が開かれている。

アキレウス　一体なにが起きてる？
誰か、この破滅から逃れる道を示せる者はいないのか？
もしもいるなら答えを示してくれ。

全軍に疫病が広まり十日。
全滅を避けるには、初心を捨て、
もはや帰国を選ぶよりほかはない事態となった。

オデュッセウス　アキレウス、
われらギリシア連合軍をこの戦いに導いた占い師が
こう言ってる……。

アキレウス　聞かせてくれ、オデュッセウス。

オデュッセウス　この疫病は、トロイアの守護神アポロンによる
仕打ちだ。

アガメムノン　占い師の戯言など聞きたくもない。

アキレウス　オデュッセウス、続けろ。

アガメムノン　察しはつく。
あの占い師は一度として俺を喜ばせたことがない。

オデュッセウス　占い師はこう言った、

十日前、トロイアの神官クリュセスが
身の代を持って訪れ、娘の解放を嘆願した……。

アガメムノン　あの女は俺の戦利品だ。

オデュッセウス　……クリュセスの願いは一顧だにされず、追い返された。
そのクリュセスがアポロンに祈ったらしい、
「どうかギリシア連合軍に、
わが子を奪われた父親の、涙の報いを与えたまえ」と。

アガメムノン　あの女は俺の戦利品だ。

アキレウス　どうすればアポロンの怒りを鎮めることができる？

オデュッセウス　この禍（わざわい）を取り去るには、
クリュセスに娘を返すしかない。

アガメムノン　占い師にこう伝えろ、
きょうまで生きながらえたことに満足しろと。
禍が起こるたび、あの占い師は俺が元凶だと口走る。

十年前もそうだ。われらの船団が風に見放され、
トロイアに向かうことができずにいたとき、
俺はあの占い師の予言にしたがい、娘を生け贄に捧げた。
この戦争のためにわが娘を殺した。
そして今度は、女を手放せと。
あれはどんな財宝よりも見事な戦利品だ。

アキレウス　アガメムノン！

アガメムノン　妻にも劣らぬ女を誰が手放せるか！

アキレウス　このままでは連合軍は全滅する！

オデュッセウス　総大将として賢明な判断をしてくれ。

アガメムノン　いつもそうしてきたように。

ああ、わかってる！

いまはなによりもまず兵士たちを救うことだ。

この禍を振り払うことができるならば、

どんな戦利品も惜しくはない。
わかってるぞ、わかってる。
俺はギリシア連合軍の総大将だ、すべての判断を下す、
よし、いいだろう、ただし、
代わりの女を用意しろ。
連合軍の王たる者が戦利品を得ずにいるのは、
屈辱を受けるのと同じだ。
屈辱を受けた王は王ではいられない
忠実にして賢明なるオデュッセウス、そうだろう？
では代わりに誰の戦利品を差し出してもらおうか？

アキレウス　戦利品はとうに分け終わってる。
いまは無条件にクリュセスに娘を返せ。

アガメムノン　勇者の名をほしいままにするアキレウス、
あらためて言っておく。

いかに女神テティスの血をひく英雄でも、
おまえが俺を説き伏せることはできない。
そもそも自分の戦利品は握ったまま、
俺にだけ手放せというのはあまりに理不尽。
俺を納得させたければ、
こちらが失うものに見合うものを差し出せ。
それとも、このアガメムノンが自ら出向き、
力ずくで奪い取るのがいいか？
どこまで私欲をむさぼれば気がすむ。

アキレウス　なに？

アガメムノン　トロイアのどの町を落としたときにも、
激しい戦場を戦い抜いた俺よりはるかに多くの財宝を
おまえは存分にさらっていった。

アキレウス　それこそ理不尽と言わずになんと言う。

アガメムノン

もとより俺はトロイア人に恨みはない。
おまえの弟メネラオスの妻が
トロイアの王子に掠奪（りゃくだつ）された、
その恥辱を同じギリシア人として晴らすためだ。
だがそれもきょうまで。
俺はあす、船団を引き連れギリシアへ帰る。
トロイアに留まり、おまえに屈辱を受けながら、
なおもおまえに富を与え続ける理由はない。
ほかの武将たちは俺を敬うが、
おまえだけは憎しみを向けてはばからない。
いいだろう、逃げ去りたければ逃げ去るがいい、
俺を守るのは最高神ゼウスの力だ。
残ってくれとは頼まん。
だが、俺は知ってる、おまえの生き甲斐は戦場にある。

殺し合いだけがおまえの生き甲斐だ。
さあ、行け。船団を引き連れ、貧しい故郷に戻るがいい。
そして気が済むまで俺を憎め。だがしかし、
俺の女を父親へ返す代わりに、
おまえの戦利品ブリセイスをいただく。

アキレウス　アガメムノン！

アガメムノン
禍から兵士たちを救うために、
俺は賢明な判断を下した。
オデュッセウス、聖なる海に船を出せ。
生け贄とする獣を積んだ上、クリュセスの娘を乗せろ。
そしておまえたち武将のひとりが一切の指揮をとれ。
禍を振り払うために犠牲を捧げ、
アポロンの呪いを鎮めてこい。

オデュッセウス　承知した。

会議を終えようとするアガメムノン。
アキレウス、剣を抜いて。

アキレウス　アガメムノン！
殺し合いが俺の生き甲斐と言ったな！
オデュッセウス　待て、アキレウス！　剣をおさめろ！
いまの言葉をおまえ自身が認めることになる！
アキレウス　（剣をおさめて）鹿のように卑怯な心、
犬のように醜い瞳。
おまえが王でいられるのは、
ほかの武将が揃いも揃って腰抜けだからだ。
俺はいま、ここに誓う。
おまえの手にするその王笏（おうしゃく）が、
一度樹木の幹から切り離され、

二度と枝葉をつけることはないように、
このアキレウスが再び戦場に立つことはない。
敵将ヘクトルの手にかかり、
ギリシア連合軍に滅びの瞬間がやってこようと、
おまえには為すすべもないだろう。
できることはただひとつ、
俺を侮辱した過ちを悟り、
兵士たちの死体の前で胸を砕くことだ。

オデュッセウス　やめておけ、アキレウス。
いかにおまえが女神から産まれた男でも、
アガメムノンは広大な領土に権威を振るう王者だ。
ゼウスが授けた栄光に逆らうな。

アガメムノン　オデュッセウス、その若者に教えてやれ、
王のなかの王に暴言を吐くことは、

誰にも許されていないことをな。

アキレウス　俺はもうおまえには従わない。
命令はほかの腰抜けたちにするがいい。
ブリセイスは引き渡すが、俺の意志でする。
疫病から連合軍を救うために。
それに、俺の女を奪い合いに巻き込みたくない。
ただし、俺の船にあるほかのものに手をかけてみろ、
そのときは俺の槍の穂先から
おまえの赤黒い血が滴ることになる。

アガメムノン　いや。
おまえの槍が俺の体に触れることは
けしてあるまい。（去る）

アキレウス　（パトロクロスに）パトロクロス、
ブリセイスに仕度をさせろ。

パトロクロス　これは恥辱だ。

アキレウス　……。

アキレウスもその場を離れる。

パトロクロス　（去って行く総大将に）おい、アガメムノン！
おまえなんかトロイアに置き去りにして、
みんなでギリシアに帰ってやる。
そのとき俺たちのありがたみを思い知れ！
アキレウスはおまえの千倍は偉大な戦士だ！
アキレウスが本気で怒（いか）れば、
おまえなんか波の泡も同然！
そのくらい敵も味方もみんな知ってる！

オデュッセウス　口が達者なようだが、

それ以上総大将を侮辱すれば船倉(ふなぐら)に叩き込む。
おまえがアキレウスの僚友でも容赦はしない。

パトロクロス　ブリセイスにはなんて言えばいい？

オデュッセウス　いまのことをすべて。

パトロクロス　冷たいやつ。

オデュッセウス　俺を恨むな。

たとえ腰抜けになりさがろうと、
いがみ合いが続けば敵がよろこぶだけだ。

パトロクロス　ああ、オデュッセウス、あなたは恨まない。

責めを負うべきは、あいつだ。
私欲のために俺たちを使い、
アキレウスの女を奪うアガメムノン。
そのうちギリシア連合軍に破滅が迫り、
アキレウスを必要とするときは証人になってくれ。

オデュッセウス

至福の神々と、残忍非道な王の前で証言しろ。
あのとき王の心は荒れ狂ってた、
その目は過去も未来も見失ってた、
連合軍の勝利と兵士の命を王が自ら手放したってな！
アキレウスに伝えてくれ。
俺は船を出し、クリュセスに娘を返しに行く。
アガメムノンは「武将のひとり」と言ったが、
あれは俺への命令だ。
十年間戦ってきて、俺はいま、こう考えてる……。
総大将がどんな男だろうと、
いまさら手ぶらでギリシアへは帰れない。（去る）

パトロクロス、ブリセイスのところへ。

第2場　『運命』

アキレウスの船陣。
アキレウス、海に向かって両手を差し伸べ、
母である女神テティスに祈る。

アキレウス　母上、あなたは、俺の命が人より短いことを
教えてくれました。ならば、
せめてその短いあいだに栄光を与えてください。
名誉を約束してほしい。
広大な領土を持つアガメムノンが、
俺からブリセイスを奪っていきました。
いまの俺は、栄光でも名誉でもなく、
屈辱で張り裂けてしまいそうです。

ご自身が産んだ子の願いを聞いてください。
あなたはオリンポスの主神ゼウスを悦ばすことができる。
ゼウスの力を借りたいのです。
この戦争、トロイア軍に加勢をし、
ギリシア連合軍を窮地に陥れるよう
計らっていただきたい。
そうなれば兵士たちは悟るはず、
禍をこうむるのはアガメムノンの愚かさゆえと。
そしてアガメムノンは、
きょう俺を侮辱したことを悔いるでしょう。

コロス（テティス）

可哀想に。
女神の体から生まれたというのに、
誰より命短く、
誰より惨めな、

愛しいわが子。
わたしはゼウスの身も心も悦こばすことができる。
約束しましょう。
おまえのためにゼウスにかけあうことを。

アキレウス　母上、感謝します。
でもその怒りを忘れずに、

コロス（テティス）　この船にとどまりなさい。
ゼウスが願いを叶えても、
けして戦場に出てはなりません。
おまえの体に流れる戦いの血が、
トロイアの城壁の下へと駆り立てても、
その誘惑に負けないように。

アキレウス　教えてください、母上。
誘惑に負けたときにはどうなりますか？

コロス（テティス）　もしもトロイアの城壁の下に行って戦えば、
おまえは栄光を手に入れるでしょう。
けれどギリシアに帰ることはできません。
死が足早に迎えに来ます。
それがおまえの運命。

アキレウス　それが俺の……。

コロス（テティス）　まだおまえが幼いころ、
おまえの不死身を願って、
冥界の川に体を浸したけれど、
人間に生まれた者の運命は、
変えることはできなかった。（消える）

船陣脇の波打ち際、ひとりになるアキレウス。

コロス

女神は波打ち際にわが子を残し、
ゼウスの座すオリンポスへ向かう。
一方、遠景の岸辺に、
オデュッセウス率いる高速船。
囚われの娘は父親を見つけ、
浜の砂をまき上げ飛んでいく。
父親は娘の名を叫び、
腕のなかへ迎え入れる。
クリュセスはアポロンに祈った。
「われを聞こしめせ、
銀(しろがね)の弓持たす君、
トロイアの守護神アポロンよ。
わが名誉のためギリシア人に与え給いし禍を、
いままた払い給わんことを！」

その祈りとともに、
ギリシア人の船を覆っていた暗雲が、
一筋もなく晴れていく。

再びアキレウスの船陣。

アキレウス　俺はもう戦場に立つことはない、
アガメムノンのために戦う理由はなにもない。
だが戦場から去ると思うだけで、
魂が鬱々と病んでいく。
戦いの誘惑を断ち切ろうとすると、
暗闇に落ちていく。
なんだ、これは？　なぜだ？

第3場　『惑わしの夢』

アガメムノンの船陣。
帰還したオデュッセウス、現れて。

オデュッセウス　われらが総大将は安眠中か。
アガメムノン　戻ったか、オデュッセウス……いま、夢を見ていた。
オデュッセウス　夢を？
アガメムノン　わが夢にゼウスの使いが現れ、
いますぐトロイアへ総攻撃をかけよと告げてきた。
すべての神々がわれらの味方につくそうだ。
オデュッセウス　惑わしの夢でなければいいが。
アガメムノン　いや、疑う必要はない。
アキレウスが戦列を離れ、

どうしたものかと思ってはいたが、
俺はつくづくゼウスに守られている。
オデュッセウスよ、
ついにトロイアを落とす日が来た。
ならば、全軍に出陣の準備を。

オデュッセウス　いや、待て。

アガメムノン　なぜ？

オデュッセウス　オデュッセウス、おまえだけが知恵者じゃない。
俺の頭もたまには働く。
約束された勝利を前に、
総大将に与えられた権利として、
全軍の士気を確かめたい。

オデュッセウス　なにをする気だ？

アガメムノン　まず、俺の口からトロイア撤退を呼びかける。

オデュッセウス　撤退を？　それを聞けば、
兵士たちは歓喜の叫びをあげて帰国の準備を始める。
アガメムノン　最後まで戦う意志のある者はいないというのか？
オデュッセウス　おそらく、ひとりとしていないだろう。
アキレウスが屈辱を受け、
戦線を離脱することが知れ渡った。
この一件で総大将に憤懣すら抱く兵士もいる。
アガメムノン　それならばなおのこと、
確かめなければ気がすまなくなった。
おまえの忠告を真に受け、
全軍の士気を疑うわけにはいくまい。
オデュッセウス　いまは味方を試すときじゃない。
十年続くこの戦いをいかに終わらせるか、
それを考えるときだ。

アガメムノン　どんなときかはおまえから教わるまでもない。
ゼウスの使いが夢で勝利を約束した、
いいか、オデュッセウス、全軍を集めろ。
おまえの言うとおり、
最後まで戦うという者がひとりもいないかどうか、
確かめてみようじゃないか。

オデュッセウス　味方を試す必要はない。
アガメムノン　誰が忠実な味方か知っておきたい。
オデュッセウス　……。

コロス　傲慢。
厚顔無恥。
英雄を侮辱し、
惑わしの夢に惑わされ、
味方の兵士を試そうとしてる。

権力者はなにも信じない。
権力者はみんなを恐れてる。
みんながアキレウスに同情していることを。

アガメムノンの演説。

アガメムノン

諸君！
もう十年になる。
相手の十倍の戦力を持つわが軍が、
小国にすぎないトロイアをいまだに攻略できていない。
これまで多くの犠牲を払った、船も朽ち始めた。
敵には絶え間なく援軍がやってくる。
トロイアを手に入れることはあきらめ、
船を海に降ろすことを提案したい。

妻や子が、老いたる父母がギリシアで帰りを待っている。
懐かしい故郷を思いながら帆を揚げようではないか。

コロス　それを聞いた兵士たち、
ひとり残らず歓喜の叫びをあげる。

オデュッセウス　オデュッセウスの言ったとおり！
待て！　試されてるのがわからないのか！
逃げた者はあとで必ず処罰される。
十年前を思い出せ。
トロイアはギリシアの宝であるヘレネを奪い去り、
われらに恥辱を与えた。
十年間戦ってなにも手に入れず戦場をあとにすれば、
あの恥辱とともに帰ることになる。
故郷へ戻るのは、
プリアモスの大都（だいと）、トロイアを手に入れてからだ！

アガメムノン　オデュッセウス、おまえの忠誠心はよくわかった。
いいか、ギリシア連合軍の勇敢なる戦士諸君！
いまオデュッセウスが言ったことがすべてだ。
これより総攻撃をかける！　槍を整え、楯を磨け！
戦場を捨て、逃げ去ることは、
ギリシア連合軍の戦士には許されない。
ヘレネを掠奪（りゃくだつ）された恥辱を晴らすため、
トロイアを攻め落とし、女という女を寝取ってやれ！

コロス　恐ろしい地響き。
無数の男たちによる行軍。
青銅の甲冑に身を固め、
木々を焼き尽くす山火事のように、
紅蓮（ぐれん）の炎となって平原を進みだす。

第４場　『カサンドラ』

トロイア城。戦場を見渡すスカイア門の塔。
その城は十年間、ギリシア連合軍の攻撃を凌いできた
堅固なる城塞。
カサンドラのモノローグ。

カサンドラ　わたしの名前はカサンドラ、
トロイア王プリアモスの娘。
わたしには未来が見える。
アポロンの愛を受け入れたとき、
代わりに授かった特別な力。
わたしはその力で、
アポロンの愛が冷めていく未来を見てしまった。

わたしがアポロンの愛を拒むと、
アポロンはその仕返しに、
誰もわたしの予言を信じないように呪いをかけた。
王である父も、母も、兄たちも、
アポロンを崇め、わたしの言葉を信じない。
十年前、二番目の兄パリスが、
ギリシアからヘレネをさらって妻にしたとき、
わたしはトロイアの滅亡を予言した。
あのときも、誰も、信じなかった。
そしてこの戦争が起きてしまった。

プリアモス　カサンドラ、なにを見ている？

カサンドラ　見るのは決まって不吉な未来……。

プリアモス　お父さまはそうおっしゃりたいのでしょう？
部屋に戻りなさい。

ギリシアが攻めて来る。

カサンドラ　見えているわ。
わたしはあの人たちに捕まって、
アガメムノンのものになる。

プリアモス　なんてことを……。
この美しいトロイアはアポロンに守られている。
おまえにも神々のご加護があるはずだ。
部屋で祈りを捧げていなさい。

カサンドラ　神々は、お父さまが思っているよりずっと嫉妬深いの。
美しいものには永遠の命を与えない。

プリアモス　カサンドラ、おまえと言い争いたくはない。
おまえもわたしの大切な子だ。
母のそばにいてやってほしい。
ほかの女たちと一緒に機を織り、

兄弟のためにチュニカを縫ってやりなさい。

カサンドラ　わかりました。

でもお父さま、アキレウスがいなくても

けして侮ってはいけません。

オデュッセウスに気をつけて。

プリアモス　オデュッセウス……。

ああ、会ったことがある。

ヘレネの処遇を話し合いに来た。

声は深く響き、言葉は冬に舞う雪のように繊細だった。

カサンドラ　たとえアガメムノンが惑わしの夢をみても、

目覚めさせるのはあの男。

オデュッセウスの知恵が、

わたしたちトロイアを滅ぼす。

プリアモス　それ以上不吉な言葉を口にするな。

わがトロイアは、銀（しろがね）の弓なす君、
アポロン神に守られている。
野蛮なギリシアの男たちを、
城のなかには一歩たりとも入れはしない。

ヘクトル、登場。

ヘクトル　カサンドラ、ここを外せ！

プリアモス　おお、ヘクトル！

カサンドラ、その場を外すも、すべてを見ている。

ヘクトル　父上に戦況を報告申し上げます。
ギリシアはアガメムノンを総大将に

全軍を挙げて総攻撃をしかけて参りました。
こちらは援軍とともに迎撃。
現在、パテイエイアの丘にて両軍ともに武器を置き、
にらみ合いの状態が続いております。

プリアモス　武器を置いて？

ヘクトル　じつは、パリスとメネラオスの一騎打ちによる決着を
ギリシア側に申し入れました。

プリアモス　パリスと言ったか？

ヘクトル　両軍の前でヘレネのために戦えるよう、
段取りをつけて欲しいと、
パリス本人の願い出がありました。

プリアモス　パリスに決闘などできるものか！
女神アフロディーテに賜った髪も顔も
なにひとつ決闘の役には立つまい。

パリスに雌雄を決する一騎打ちなど……。
あの子は、兄のおまえとは違うのだ、ヘクトル。

ヘクトル　パリス自身が言い出したことです。
この決闘は十年前にすべきだったと。

プリアモス　勝算があると思うか？
パリスは生きて戻れるか？

ヘクトル　父上、この戦争の火種を作った男が、
はじめて自分から言い出したことです。
一騎打ちに勝ったほうがヘレネを手に入れ、
トロイアとギリシアは和平を結ぶ、
そして、トロイア人たちはこの豊かな大地で
ふたたび平和を取り戻す。
みな、それを望んでいます。

プリアモス　しかし、メネラオスは勇猛な男。

妻をさらった若者が相手となれば、
恥辱を晴らさんとばかり決死の覚悟で挑んでくる。

ヘクトル　どちらが勝つかは運命が決めるでしょう。

プリアモス　無理だ、パリスに決闘など……。

ヘクトル　父上、どうか、お許しを願います。
つきましては、メネラオスから条件が出されています。
決闘の生け贄として、
ゼウスに捧げる白い牡羊一頭と、
黒い牡羊一頭を準備してほしいと。
そしてもうひとつ、ゼウスの名のもとに締結する和平を
どちらも破ることのないように、
偉大なる王プリアモスに決闘を見届けるようにと。

カサンドラ　嘘よ、お父さま。
ヘレネを奪い返したら、

ヘクトル　ギリシアが和平を結ぶはずがない。
カサンドラ　口を挟むな、カサンドラ。
ヘクトル　トロイアは騙される。
プリアモス　カサンドラ！
　和平は誰よりわたしが望むこと、
　そのためにわが子の命を……。
ヘクトル　トロイアの大地にこれ以上血を流さずにすみます。
カサンドラ　お父さま。
プリアモス　わかった。
　決闘を許そう。
ヘクトル　感謝します、
　トロイアの偉大なる王プリアモスに。
プリアモス　しかし、ヘクトル、
　わが子が殺されるのをこの目で見る勇気はない。

ヘクトル　わかりました。（去る）

カサンドラのモノローグ。

カサンドラ　決闘が始まった。
両軍が腰を下ろして見つめるなか、
ヘクトルとオデュッセウスが決闘場の印を地面に描く。
兜に入れたくじ札で、槍を投げる順番が決まる。
パリスの槍は敵の楯にさえぎられ、
メネラオスの槍は獲物の脇腹をかすめる。
すかさず剣を抜いたメネラオスが、
パリスの兜めがけて振り下ろす。
そのとき幸運の女神はパリスに微笑み、
パリスの兜が敵の剣を砕き散らす。

怒り狂った獣はパリスを兜ごとつかみあげ、
怪力にまかせて地面に投げ倒す。
凄まじい土埃のなか、引きずられていくパリス。
すると突然、パリスの兜のあごひもが千切れる。
メネラオスは手に残った空の兜を放り投げ、
とどめを刺すために振り返る。
けれど、パリスの姿は消えている。
女神が土埃を煙幕にして、
トロイアの若い王子を匿った。
パリスはまたも卑怯者と呼ばれて決闘が終わる。
きょう、パリスは命拾いをしたけれど、
わたしに見えるトロイアの運命は、
それとはまったく正反対。

プリアモス　どうなった？

ここからでは決闘の様子がわからん。
パリスはどうした、カサンドラ。
カサンドラ　大丈夫。パリスは生きてる。
プリアモス　おお、本当か？

ヘクトル、戻って来て。

ヘクトル　（プリアモスに）パリスが消えました。
おそらく、城に逃げ込んだのでしょう。
プリアモス　生き延びたか。
ヘクトル　取り返しのつかないことをしでかしました。
これで和平は望めなくなった。
プリアモス　そうだな……。
ヘクトル　そればかりではありません。

パリスが消えたあと、わが軍のひとりが
メネラオスに矢を射かけました。

プリアモス　なぜそんなことを。
ヘクトル　功を急いだか、あるいはその一本の矢で、
戦争を終わらせることができると思ったか。

プリアモス　ゼウスに生け贄を捧げた神聖な決闘だったはず。
ヘクトル　わが軍は一騎打ちによる和平を提案しながら、
決闘から逃げ出し、不意打ちをしたことになります。

プリアモス　メネラオスはどうした？
ヘクトル　足を負傷しましたが死んではいません。
しかし、アガメムノンを怒らせました。
怒りの塊（かたまり）となって攻めて来るでしょう。

プリアモス　ヘクトルよ、
おまえにはそれを迎え撃ってもらわなければならない。

ヘクトル　そのつもりです。
どうぞ父上は宮殿の奥へいらしてください。
プリアモス　最後までトロイアを支えていただかなくてはなりません。
きょうまでトロイアが戦って来られたのは、
神々のご加護と、近隣諸国の援軍があったからだ。
みな、野蛮なギリシア人の侵略を食い止めるため、
命をかけてくれている。
トロイアが永遠に続くことを願ってくれている。
だからこそトロイアの軍隊とわたしの息子たちは、
つねにその戦いの中心にいなければならない。
おまえが頼りだ、ヘクトル。
ヘクトル　さあ、父上、宮殿へ。
プリアモス　城は女と子どもだけになっても構わん。
戦える者はひとり残らず連れて行きなさい。

ヘクトル　はい。

プリアモス、スカイア門を去る。

カサンドラ　お兄さまは、いまなにが起きているかわかる？
いつか死ぬべき運命にある人間たちを、
永遠の命をもつ神々がもてあそんでいるの。
戦争という人間世界の禍は、
神々にとっては戲れよ。

ヘクトル　カサンドラ、
母上たちを連れてアテナの神殿へ行け。
王宮にある上等なペプロスと、
財宝を集め、女神像に捧げるよう伝えてくれ。

カサンドラ　戻るの、戦場へ？

ヘクトル　大きな禍がふりかかろうとしてる。
戦いの女神に祈ってくれ。
トロイアの息子たちを哀れむように。
カサンドラ　口に出さないだけでわかってるはず……。
トロイアの運命を。
ヘクトル　馬鹿を言うな。
カサンドラ　でもトロイアの物語は未来永劫語り継がれていく。
あとかたもなく滅びてしまうから、
だから言葉で語られていく。
ヘクトル　急げ。

カサンドラ、立ち去る。
ヘクトル、手にしていた兜を被り、剣をとる。

第5場　『幼子』

前場のつづき。同じく、スカイア門にて。
アンドロマケ、登場。
侍女／コロスの腕にヘクトルの幼子が抱かれている。

アンドロマケ　そんなに城の外に戻りたいの？
ヘクトル　カサンドラは不吉な未来ばかり口に出す。
悪い癖だ。
アンドロマケ　女は誰でも不吉な未来を予言するの。
なぜかわかる？
ヘクトル　さあ。
アンドロマケ　強い男にそれを覆（くつがえ）してもらいたいから。
ヘクトル　俺はそのつもりだ。

アンドロマケ　でもあなたの強さはあなた自身を滅ぼしてしまう。
これまでで一番大きな戦いになるのでしょう？

ヘクトル　行くぞ、もう味方が待ってる。

アンドロマケ　あなたが出て行けば、
一斉に攻撃を受けて殺される。
哀れに思わないの、こんなに幼いわが子を残して！

ヘクトル　俺はギリシアの男たちには殺されない。

アンドロマケ　それでももしあなたが死んでしまったら、
わたしだって生きられない。
生まれ故郷がギリシア人に滅ぼされたとき、
父はアキレウスに殺された。
七人いた兄弟もすべて殺された。
母はその哀しみで死んでしまった。
あなたは父や母や兄たちの代わりに、

わたしを守ってくれる人。
お願い、ヘクトル、どうかわたしを哀れんで。
そしてここに残って。戦わないで。

ヘクトル　アンドロマケ……。

アンドロマケ　考えたの……。
前線をあのイチジクの木まで撤退させて。
この城の高い壁が、わたしたちを守ってくれる。
だからいつでも逃げ込めるところにいて。

ヘクトル　ああ、俺もよくわかってる。
トロイアの城壁は高くそびえることで、
プリアモスの美しい都を守り抜くだろう。
だが俺は最前線で闘うことで、
プリアモスの名誉を守る。そして俺自身の名誉も。
戦場から離れた場所に引きこもっていては、

アンドロマケ　それはできない。
　あなたがいなくなったら、
　この子とわたしはどうなるの？

ヘクトル　もしもこのトロイアが滅ぶ日が来るとして、
　俺が思い浮かべるのは、
　父や母や弟たちの痛ましい姿じゃない。
　ギリシアの兵士に連れて行かれ、
　奴隷にされるおまえの姿だ。
　嘆き悲しむおまえを指差して人は言うだろう、
　「見ろ、あれがヘクトルの妻だった女だ」と。
　だが、アンドロマケ、俺は死なない。
　おまえをギリシア人の奴隷にはしない。
　さあ、出陣の前にわが子を抱かせてくれ。

アンドロマケ、侍女からわが子を引き受け、
ヘクトルに抱かせる。
すると、幼子はヘクトルを見て泣きだす。

アンドロマケ　父親を見て泣くなんて。
ヘクトル　この姿が怖がらせた。

ヘクトル、武具をとり、地面に置く。
幼子、やがて泣き止む。
ふたり、微笑む。
ヘクトル、アンドロマケを抱きしめる。
そして、わが子を高々と掲げる。

ヘクトル　ゼウスよ、天の神々よ、

この子をわたしのような男にしたまえ！
トロイア最強の戦士に、トロイアの王にしたまえ。
戦場から戻るこの子を見る者たちが、
父親以上の豪傑と讃える男にしたまえ。
この子が戦利品を持ち帰ると、
それを迎える母親に心からの喜びを与える男にしたまえ。

ヘクトル、幼子をアンドロマケに戻す。

ヘクトル　この子をおまえに託す。
そんなに悲しむな。
アンドロマケ　悲しんでいるように見える？
ヘクトル　……。
アンドロマケ　笑ってるわ。

アンドロマケ、微笑みながら泣いている。

ヘクトル　勇敢な戦士だろうと腰抜けだろうと、
人間は皆、死すべき運命を持って生まれて来る。
誰も運命からは逃れることはできない。
まだ運命が尽きぬというなら、俺は殺されない。
さあ、おまえの仕事をしてくれ。
糸を紡いで、機を織れ。
俺のために美しいチュニカを頼む。
戦争はトロイアの男たちにまかせろ。
俺は一番大きな仕事をしに行って来る。

ヘクトル、再び兜を着ける。

アンドロマケ　生きているあなたを見てるのに、
どうしてこんなに泣けてしまうの？

ヘクトル、スカイア門を出て、戦場へ向かう。
アンドロマケ、ヘクトルを見送る。

（歌）

カサンドラ　人は　なぜに　戦う
怒り　栄光　運命
人は　なぜに　戦う
怒り　栄光　運命

第６場　『最前線』

トロイアの平原。
最前線へ躍り出るヘクトル。
カサンドラ、戦場の様子を見ている。

コロス（ギリシア兵）　ヘクトルだ！
ヘクトルが来た！
アガメムノン　全軍、隊列を整えろ！
コロス（ギリシア兵）　隊列を整えろ！
！
オデュッセウス　いや、待て。槍を下げてる。戦闘中止の合図だ。
アガメムノン　全軍、戦闘中止！
コロス（ギリシア兵）　戦闘中止！

ヘクトル　！

ギリシアの男たちよ、よく聞け。
神々はわれら人間に多くの約束をし、
ありとあらゆる幻想を抱かせる。
だが結局のところ与えるものは、
苦難と苦痛ばかり。
両軍のいずれかが壊滅するまでこの状態は続くだろう。
そこで提案したい！
もしもギリシア連合軍のなかに
わたしと一騎打ちする勇気のある武将があれば、
挑戦を受ける。
このヘクトルは、きょうこそ自らの運命に、
真正面から立ち向かうつもりでいる。
一戦交えんとする者は出てくるがいい！

コロス（ギリシア兵）　ヘクトルが決闘を申し出た！
ヘクトルと決闘！

オデュッセウス　アキレウスがいないのを承知で言ってる。
この決闘は受けるべきじゃない。

アガメムノン　とはいえ怖じ気づいてはいられん……。

オデュッセウス　よせ、アガメムノン。

アガメムノン　ヘクトル、貴様に運命をつきつける勇者を、
たったひとり選ぶというのはたやすくない。
ギリシア連合軍には勇敢な戦士がごまんといる。

ヘクトル　無駄話はいい！
ヘクトルの相手になる者がいるならば、
手早く決めろ。

アガメムノン　槍でも磨いておとなしく待ってろ！
武将たちがこぞって名乗りをあげている。

いま、くじ札でおまえの相手を決めてやる。

アガメムノン、自分の兜をとり、味方に向かって。

アガメムノン　これから兜をまわす。
名乗りをあげる者はこのなかに紋章を入れろ。
まずは、俺だ、アガメムノン……。
兜をまわせ！　紋章を入れろ！

コロス（ギリシア兵）　大アイアス！
兜をまわせ！　紋章を入れろ！
ディオメデス！
兜をまわせ！　紋章を入れろ！
メリオネス！
兜をまわせ！　紋章を入れろ！

エウリピュロス！
兜をまわせ！　紋章を入れろ！
オデュッセウス！
日が暮れるぞ、アガメムノン。
ヘクトル　ヘクトルを討ちとる権利、
アガメムノン　誰が手にするかを決定する。
（兜から紋章を取り出して）この紋章は……。
喜べ、ヘクトル！
ギリシア連合軍において最も誇り高い武将のひとり、
大アイアスがおまえにとどめを刺すことになった！
ヘクトル　誰でも構わん！
槍をとれ！
アガメムノン　卑怯者の兄を倒して来い、大アイアス！

雄叫びとともに、敵に襲いかかるヘクトル。
激突する武具の音。
突然、夜の闇が決闘場を覆う。

オデュッセウス　よし、ここまでだ。

アガメムノン　生き長らえたな、ヘクトル。
貴様のむくろは、
真昼の太陽の下で拝ませてもらうことにする。
全軍、船陣へ向かって引き返せ！

カサンドラのモノローグ。

カサンドラ　この日、戦闘の女神アテナは、
ふたつの決闘にいずれも勝敗をつけなかった。

太陽が西の空に沈んだのち、
トロイア城に戻ったヘクトルは、
命あるまま家族に迎えられた。
でも、ヘクトルとトロイアの運命は、
神々の気まぐれで、ほんの数日延びただけ。
本当の最後は、この日のようには終わらない。

幼子を抱いたアンドロマケとプリアモス、
ヘクトルを出迎える。

第7場　『休戦日』

アガメムノンの船陣。
プリアモスの使者たち／コロスが財宝を携え、
アガメムノンを訪れている。

コロス　われらプリアモス王の使いとして参りました。
メネラオスとパリスの決闘において、
協定破りの不意打ちをした償いとして、
こちらの財宝をおおさめいただきたく。

アガメムノン　プリアモスに伝えるがいい、
トロイアの落日が迫っていることは、
どんな愚か者の目にも明らか。
たとえヘレネを返してきたところで引き下がるわけもない。

まして、その用意すらないとなれば、
なにを持参しようと受け取るものか。
貢ぎ物は持ち帰れ。
ただし、こちらから土産を持たせてやる……。
あすの一昼夜、休戦の申し入れをする。

コロス　休戦！

アガメムノン　互いにきょうの戦闘で多くの死者を出した。
あすは日の出から遺体を回収し、
ゼウスの儀式に則り、火葬しようではないか。
さあ、承知したならさっさと戻れ。

プリアモス王の使者たち／コロス、立ち去る。

アガメムノン　これでいいか、オデュッセウス？

財宝を置いて行かせることもできたが。

オデュッセウス　あれはそのうち手に入る。

それよりもきょうは休戦の申し入れを信じさせたい。

アガメムノン　あすの一日、

逆にトロイアを優位にしないだろうな？

オデュッセウス　いや、ギリシア連合軍にとって、

勝利を近づける一日になる。

（歌）

コロス　男たちは武器をおき

太陽照りつける平原を

涙を浮かべて歩き回る

敵も味方も入り乱れ

血だらけのむくろを水で洗い

仲間を見分けて運び出す
灼ける太陽　静かな戦場
生きてる者が死んだ友を運んでいく
涙を飲み込む音が響きわたる

オデュッセウス　遺体を火葬するための休戦と思わせ、
こちらはそのあいだに防壁を築き、壕をめぐらす。
そうすればトロイア軍の戦車が攻めて来ても、
この船陣を守れる。

アガメムノン　真っ先におまえが逃げ込むためじゃないだろうな？
……冗談だ。

オデュッセウス　いや、そうなるかもしれない。
ヘクトルが前線に出てくれば、
多くの味方が犠牲になる。
これ以上味方を死なせるべきではない。

アキレウスがいなくなったとき、
すぐに守りを固めるべきだった。

アガメムノン　またアキレウスか。
アキレウス、アキレウス、アキレウス！
俺はゼウスに守られてる、なにが不足だ！

コロス　戦場に立ち上る
倒れた仲間を焼く煙
気づいているのか　死んだ者は
人は　なぜに　戦う
気づかないのか　生きてる者は
人は　なぜに　戦う

第８場　『野営』

休戦明けの朝。
アンドロマケのモノローグ。

アンドロマケ　朝になるとヘクトルは
取り憑かれたように城を出て行きました。
平原のまんなかでぶつかり合う楯と槍。
赤い血に染まっていく大地。
太陽が一番高いところに上がるころ、
ギリシア軍の戦車が下がり始め、
トロイアが優勢に見えました。
追いかけていくヘクトル。
逃げる敵を追いつめて、

わたしの視界から消えてしまった。
その先で夫を待っていたのは、
勝利の女神ではありません。
一夜にして掘られた巨大な壕と、
高くそびえる防壁の影。
壁の上から聞こえてくる敵の声。
ヘクトルに射かけろ！　ヘクトルを射て！
臆病者の放つ矢が勇者の鎧を貫くものか！
あの猛犬を狙え！
こんな壁と壕でわれらを防げると思ったか。
必ずギリシア人どもの船陣に辿り着き、
船という船を焼き尽くしてやる。

アガメムノン
　ヘクトル
アガメムノン
　ヘクトル

アンドロマケのモノローグ。

アンドロマケ　大地に降りる夜の帳。
ギリシア軍を追いつめながら、
ヘクトルはこの日も
夜の声に従わなければなりませんでした。
夫は早すぎる日没をうらやみながら、
敵陣の目の前でかがり火を焚きました。
城へは戻らないつもりです。
オデュッセウス　太陽が沈むのがもう少し遅ければ、
危なかったかもしれない。
アガメムノン　みろ、ヘクトルは引き揚げない。
俺たちを取り囲んだまま野営する気だ。
どうする、オデュッセウス？
あの狂犬を追い払うことはできないではないか。
オデュッセウス　あれ以上近づけない証拠だ。

壕と壁があれば総攻撃を受けることはない。

アガメムノン　やつは船を焼くと言っていた。
総攻撃はいらん、火のついた矢を射かければいい。
いくら壕と壁で守りを固めても、
このままではやられるぞ、オデュッセウス！

オデュッセウス　勝機は必ず来る。
待つしかない。

アガメムノン　なんということだ。
敵の十倍の戦力を率いて海を渡り、
トロイアを攻め落としに来たというのに、
逆に包囲されてしまった。
しかもたった一匹の狂犬に閉じ込められている！

オデュッセウス　……。

アガメムノン　なにを待つ？

おまえはなにを待ってると言った？

アンドロマケのモノローグ。

アンドロマケ　この十年間、どんなに激しい戦いをしても、
夜は必ず私たちと過ごしたヘクトルが、
はじめて野営を張りました。
夫は、運命の糸に引き戻されることを恐れてはいません。
誇り高い勝利に向かってただ進もうとしています。
戦場の男たちはみんな同じ。
わたしにはそう見えます。

第９場　『交渉』

その夜。
アキレウスの船陣。竪琴を弾くアキレウス。
傍らでパトロクロスがそれを聴く。
オデュッセウスがやって来る。

アキレウス　パトロクロス、外せ。
オデュッセウス　オデュッセウス、これを聴きにきたなら歓迎する。
アキレウス　竪琴を聴きに来たのではない。
オデュッセウス　じゃあ、なにをしに来た？
ここには目ぼしい戦利品はないぞ。
みんなヘクトルを恐れてる。
一度も野営などしたことのなかったヘクトルが、

今夜は壕のすぐ向こうで、
何千というかがり火を焚いている。
アキレウス　ならばこんなところに来ている場合じゃない。
オデュッセウスが知恵を絞らなければ、
夜明けには全軍、ヘクトルの餌食だ。
オデュッセウス　おまえがその竪琴を槍に持ち替えてくれれば、
船を守ることができる。
アキレウス　それを言いに来たなら無駄足だ。
オデュッセウス　いまのヘクトルは神もギリシアも恐れてはいない。
故郷から遥か遠くはなれたこのトロイアで、
ギリシアの王と戦士たちがみな死ぬ。
アキレウス、おまえが怒りを鎮めてさえくれれば、
まだ味方を救える。
アキレウス　俺の怒りを鎮めることができる者は、

この地上にはひとりもない。
命がけで戦うことが一体なにになる？
勇敢な者にも卑怯者にも運命はやってくる。
栄光なんてものはない、等しく死が訪れるだけだ。
さあ、帰れ。

オデュッセウス　聞いてくれ。アガメムノンが約束をした……。
もしおまえが怒りをおさめてくれるなら、
膨大な財宝を与えると言った。
黄金に青銅、馬に女七人、
奪い取ったブリセイスも返すと言ってる。

アキレウス　どうせおまえが取り付けた約束だろう？
アガメムノンが自分から言い出すはずがない。

オデュッセウス　どうとでも思え。
だが、間違いなくギリシア連合軍総大将が約束した。

アキレウス

しかもトロイアを攻略すれば、
城にある財宝は好きなだけ持って行っていい。
俺はこれまで何百日も、血みどろの戦場で戦ってきた。
船に乗っては十二の町を破壊し、
大地を行軍しては十一の町を焼き尽くした。
その都度、奪った財宝は、
陣屋でのうのうとしているだけのアガメムノンに
差し出してきた。幾ばくかの分け前には預かったが、
ほとんどはあいつが自分の船倉にしまい込んだ。
俺にはいま、なにも残ってない。
愛していた女を取り上げられたんだ。
戦争で奪った女だろうと関係ない、
あれは俺が勝ち得た栄光そのものだ。
アガメムノンはそれさえ俺から奪った。

オデュッセウス　ブリセイスを寝室に入れたことは一度もないそうだ、
厳に誓うと言ってる。
あの女はまだアガメムノンのものにはなっていない。

アキレウス　俺を説き伏せようとするな。
それよりヘクトルから船陣を守る策を練っていろ。
俺は自分の部隊を連れて故郷へ帰る。
アガメムノンにそう伝えるがいい。

オデュッセウス　栄光を求めてここへ来たんじゃないのか！
ヘクトルはいま、自分を最強の戦士と信じきってる。
ギリシア連合軍は殲滅されるかもしれない。
もしもおまえが戦場に復帰してくれたら、
味方はアキレウスの名を神のように称える。
そしてヘクトルを倒せば永遠の栄光がおまえのものだ。

アキレウス　俺はもう帰りたいんだ。

アガメムノンがどうなろうと関係ない。
どんな戦利品を与えられても、
あいつから受けた屈辱は忘れない。
俺は自分の屋敷で自分のものに囲まれ、
愛する人間たちと平和に過ごしたい。
トロイアの城壁の向こうにある財宝には、
命にまさる値打ちがあるか？
命は黄金や家畜とは違う、
誰かから奪い取っても自分のものにはならない。
それ以上の価値があると言えるのか、
このトロイアに？　この戦争に？

オデュッセウス　……。

アキレウス　みんなに伝えてくれ、
俺は、この怒りを燃やし続ける。復帰はしない。

ただしヘクトルが俺の船に辿り着いたときには、
俺はやつを止める。
そのときが来ないかぎり、
戦争に手をかすつもりはない。

オデュッセウス　わかった。
その返事をアガメムノンに伝えよう。
だが俺は、英雄アキレウスが目前の戦場を捨て、
故郷に逃げ帰るとは思わん。
おまえも俺も、命にまさる栄光を求めてる。
それが戦場にしかないことを知ってるからな。

オデュッセウス、
アキレウスの船陣を出る。
オデュッセウスのモノローグ。

オデュッセウス

俺はアキレウスの説得に失敗した。
ヘクトルはいつ襲撃してくるかわからない。
こんな恐怖と苦しみの夜を過ごしていては、
兵士たちの忠誠心も長くは保てないだろう。
待つか、仕掛るか、決断するには、
ヘクトルの腹づもりを知る必要がある。
俺は敵の野営に潜入することにした。
夜明けまであと数時間。
防壁の外に出て、壕を越えた。
闇のなかで光る甲冑を捨て、
重なりあった死体から武器を奪って武装した。
ヘクトルの居場所に辿り着く前に、
女神が俺に獲物を与えてくれた。
トロイア軍の密偵を捕らえたのだ。

そいつは俺と同じ任務を負っていたにもかかわらず、
惨めに命乞いをしながら口を割った。
ヘクトルはまだ攻めて来ない、
奇襲をかけるなら孤立した援軍部隊がよかろうと、
知りたいことをぺらぺらしゃべった。
頭を斬り落とした後も、口だけ勝手に動いていたほどだ。
俺は夜が明ける前に船陣に戻った。
ヘクトルの腹がわかった。戦う準備ができる。
そして暁の女神オーロラが現れたとき、
アガメムノンは全軍に出撃を命じた。

進軍の音、けたたましく。

第10場　『猛襲』

アキレウスの船陣。
パトロクロスがアキレウスに戦況を告げる。

パトロクロス　アキレウス！
ヘクトルがいる！
ここからでもはっきりわかる。
雲の合間に煌々（こうこう）と光る星のようだ。

アキレウス　連合軍の指揮は誰が執ってる？

パトロクロス　最初はアガメムノンだったが、腕をやられた。
進軍したときはすさまじい勢いで、
敵の首を麦の穂を刈るように切り落としてた。
それにきょうのアガメムノンは、

いちばん白熱してるところへ
自分から飛び込んでいった。
あんなアガメムノンは見たことがない。
ずっと戦闘の真ん真ん中で戦ってた。
でも腕に槍を受けて戦闘から外れた。
じゃあ、いまは誰が？
代わりにオデュッセウスが。
でも、もう敵の勢いが圧倒してる。
波の泡のように味方の頭が飛び散ってる！
土埃が真っ赤に見えるけど、
あれは味方の血飛沫だ。
負けるぞ、アキレウス。
ヘクトルの餌食になる。
ギリシア連合軍が敗北する。

アキレウス
パトロクロス

アキレウス　すまないが、
俺の部隊は戦闘には加わらない。
耐えてくれ。
パトロクロス　アキレウス！
俺たちはこの悲惨な敗北を、
指をくわえて見てるだけか！
アキレウス　軍医のマカオンが負傷したらしい。
息があるかどうか見てきてくれ。
パトロクロス　船陣は負傷兵でごった返してる。
やられたのはマカオンだけじゃない！
アキレウス　あいつは傷の手当てができる。
無事なら、まだ千人は助かる。
パトロクロス　負傷兵の見舞いより、
俺は戦場へ行って戦いたい！

アキレウス　おまえの気持ちはわかる。
だが、アキレウスの部隊は戦わない。

パトロクロス　本当にわかってるのか？
英雄アキレウスの部隊にいながら戦えない兵士が
どんなに惨めで苦しい思いをしてるかを。
傷ついた仲間たちの脇を通れば、
みんなが俺の足にすがって、
戦場に出てくれと血の涙を流す。
アキレウスは仲間を見殺しにするのかと聞いてくる。
あの目を見ることほど辛いことはない、
こんな辛いことが戦場にあるとは思わなかった。
頼む、アキレウス。戦闘に加われと命令してくれ。

アキレウス　軍医の様子を見て来い。

パトロクロス　欲しいのはその命令じゃない。

アキレウス　見て来い。

パトロクロス　……わかった。

見て来る。

パトロクロスのモノローグ。

パトロクロス　ヘクトルが防壁の前まで攻め込んで来た。

大声で壕を渡れと命じているが、

馬が怯えて動かない。

ヘクトルは戦車を降り、自分の足で攻めて来る。

これまで戦ってきた十年間で、

ここまで敵に攻め込まれたことはない。

石が真冬の猛吹雪のように飛び交うなか、

ひとりまたひとりと防壁に辿り着く。

壁を揺さぶり、胸板を打ち壊し、支柱を倒そうとしてる。
いつか死ぬ運命ならばここで死のうと、
ヘクトルの部隊は一丸となって力を込める。
俺はこの瞬間、とんでもないことを思った。
兵士として戦場に戻れるなら、
味方でも敵でも構わない。
あの運命を悟った群れのなかのひとりになりたいと、
心の底からうらやんだ。
そしてとうとう、壁の一カ所が崩れた。
兵士たちがなだれ込んで来る。
肉弾戦が始まった。

アガメムノンの船陣。
負傷したアガメムノンとオデュッセウス。

アガメムノン　ヘクトルが船に火をかけに来る。
オデュッセウス　この攻撃は退散させるためのものじゃない。
全滅させる気だ。
アガメムノン　俺はやつを止めることができなかった。
味方の恐怖心が俺への怒りとなっていくのがわかる。
みなアキレウスと同じだ、
まもなく剣も槍も捨てるだろう。
俺すらこの怪我では戦えない。
戦えないのなら、逃げるしかない。
残された唯一の手段なら、
逃げることこそ、生きる道。
オデュッセウス、これは命令だ、
次の夜まで身を潜め、闇に乗じて船を出せ。
そしてここから立ち去る。

オデュッセウス　それが王のなかの王が下す命令か！
十年間も家族と離れ、戦闘を繰り返してきたあげく、
トロイアを諦めて帰るというのか。
王笏を握る者は、勝利をつかみとること以外に、
どんな命令も下すべきじゃない。

アガメムノン　おまえの言葉は胸をえぐる。
しかし、どうすればいい？
おまえにまだ策があるか？

オデュッセウス　たとえ万策尽きても、
王たる者は戦場にいるべきだ。
王が残ってさえいれば、兵士は戦える。
戦えば兵士は兵士として命を全うできる。
敵の前に立つしかない。
ヘクトルの眼に映るものが敗残する背中でいいのか。

いや、誇り高く立ち向かう
ギリシア戦士の姿でなければならないはず。

ヘクトルのモノローグ。

ヘクトル　突進する俺たちの前方に、
連合軍の武将たちが立ちはだかっているのが見えた。
手負いの総大将アガメムノン、
背後には深手を負ったオデュッセウス。
ついに来た。はじめて敵陣の懐に攻め込んだ。
急ぐな。息を整えろ。すべてを見ろ。
どこかにアキレウスがいる。
いつか必ずあいつが出てくる。
それまではまだ本当の戦いじゃない。

それにしてもなんという数の船。
だがきょうは、ギリシアへ逃げ帰る船が
一隻もなくなるまで焼き尽くす。

アガメムノンとオデュッセウス。

アガメムノン　ヘクトルはなぜ止まった？
オデュッセウス　隊列を分断しないよう、
味方が追いつくのを待っている。
アガメムノン　ならば敵が一丸となる前に攻撃を仕掛けろ。
オデュッセウス　大アイアスの部隊を前線に送ろう。
アガメムノン　ここで手柄を上げれば、俺の国をひとつ与える。

ヘクトルのモノローグ。

ヘクトル

大アイアスが吠えかかってきた。
俺は敵を狙って一直線に槍を投げた。
胸に命中したが、穂先が皮膚に達する前に、
分厚い鎧で食い止められた。
すると今度は大アイアスが地面の岩を抱え上げ、
雄叫びとともに投げつけてきた。
角ばった岩は回転しながら、
思いがけない軌道を描いて迫ってきた。
その一瞬のあいだに俺は察した。
神々はこの期に及んでもまだ、
トロイアの勝利を約束する気にならないらしい。
岩は俺の首を直撃した。
俺は、土の上に、倒れた。
土埃のなかで意識が薄れ、

敵の勝鬨が上がるのを感じた。

アガメムノンとオデュッセウス。

アガメムノン　倒れた！

オデュッセウス　ヘクトルが倒れた！

アガメムノン　トロイア軍の兵士がヘクトルに群がってる。

オデュッセウス　死んだか？

アガメムノン　いや、わからない。

オデュッセウス　だが、敵は下がっていく。

勝てるぞ、オデュッセウス！

逃がすな、一気にトロイアを叩き潰せ！

トロイア軍は背中を向けた！

全軍、ヘクトルを追え！

ヘクトルのモノローグ。

ヘクトル　敵は攻勢に転じ、猛然と追ってくる。
味方は俺の体を担ぎ上げ、来た道を逆走する。
敵の息の根を止めるところまで、
あと一歩まで迫っていた。
その一歩を戦闘の女神が許さなかった。
敵も味方も、そして俺自身も、
ヘクトルは死んだと思った。
だが、まだ運命の訪れではなかった。
ギリシア連合軍が追いつかれたとき、
またもや女神の気まぐれに揺り動かされるように、
俺は闇のなかから叫びを上げて起き上がった。
そこにいた全員が、亡霊を見たかのように後ずさる。

つぎの瞬間、俺のまわりに味方が駆け寄り、
全軍が久しぶりにひとつになった。

アガメムノンとオデュッセウス。

オデュッセウス　不死身か、ヘクトル。
アガメムノン　あいつは悪夢だ。
悪夢と戦う術などあるはずもない。

ヘクトルのモノローグ。

ヘクトル　俺には大アイアスに食らった傷の痛みもなく、
疲れも感じていなかった。
トロイア軍は荒れ狂う嵐の海と化し、

飛んで来る石つぶてを飲み込むように、
また前へと進んだ。

アガメムノンとオデュッセウス。

オデュッセウス　勇敢なるギリシャ連合軍の戦士たちよ、
楯となって船を守れ。
この千艘の黒船からなる要塞は、
われらが故郷ギリシアの家。
各々頑強なる人間の楯となり、
船を守れ！

アガメムノン　狂いそうだ、オデュッセウス。
なんなんだ、この寒気。
俺は娘を殺した、ああ、イフィゲネイア。

娘の命をこの戦争のために捧げたというのに。
あれほどの犠牲を払って戦ってきたというのに。
そんな冷徹な心のギリシアの王者が、
たったひとりの敵に心臓を凍らせている。
いや、俺はそんな男じゃない。
違う、違うぞ。
もしも俺が狂い出したら、縛り上げてくれ。
なにも口走らないように。
どのみち俺にはもう運命というものがわからない。
ゼウスは俺を守ろうとしているのか、
それとも見放したのか。
ああ、寒いぞ、寒い。
落ち着け、アガメムノン。
寒さは血を流したせいだ。

オデュッセウス

アガメムノン　この頭に麻袋を被せてくれ。
俺の耳を塞いでほしい。
ヘクトルの血の脈動が、
あの兜の下で音を立てているのが聞こえて来る。

ヘクトルのモノローグ。

ヘクトル　俺を真正面に見た敵兵が逃げていく。
残ったのは甲板の上の大アイアスの部隊。
俺は槍を捨て、剣を抜く。
甲板の上に赤い血の川が流れ、
船の腹を伝って黒い地面に滴った。
長年思い描いてきた戦闘。
敵の船陣での流血戦。

トロイアの大地が血で汚(けが)されるのは終わりだ！
大アイアス！　運命を悟れ！
きょう勝利するのはこのヘクトルだということを！

ヘクトル、剣を振り上げ、振り下ろす。
ヘクトルの周りに誰もいなくなる。

ヘクトル　大アイアスは逃げ去った。
総大将アガメムノンも、
背後にいたオデュッセウスも、
俺の視界から消えていた。
だからといって、俺がいま、
ここですべきことは変わらない。

ヘクトル、ギリシア連合軍の船陣に火をかける。
炎に包まれる船陣。

第11場　『パトロクロス』

アキレウスの船陣。
迫る炎を眼のあたりにしてもなお、
動かずにいるアキレウス。

パトロクロス　（涙ながらに）アキレウス、聞いてくれ！
おまえが怒りを忘れてないことはわかってる。
だから、どうか怒らないで聞いて欲しい。
連合軍の王たちはみんな負傷した。
アガメムノンも、オデュッセウスも戦えない。
傷を負った仲間が次々と死んでいく。

アキレウス　泣いてるのか、おまえ？

パトロクロス　これでもまだ、ギリシア最強の戦士アキレウスは、

自分の怒りに閉じこもったままなのか。
怒りの殻のなかで腐り果てるつもりか。
おまえが戦わないなら、せめて俺に戦わせてくれ。
おまえの部隊を俺に預け、
戦場に出ることを許してくれ。

アキレウス　俺の部隊は俺の手足。
動くときには頭と一緒だ。

パトロクロス　頼む、戦わせてくれ。
それからおまえの鎧を貸して欲しい。

アキレウス　なにを言ってる？

パトロクロス　アキレウスの兜と甲冑をつけて戦場に出れば、
敵はアキレウスが現れたと思って逃げ出す。
俺がやつらをトロイアの城壁まで追い返してみせる。

アキレウス　それはおまえの知恵か？

パトロクロス　いや、長老が俺に託してくれた作戦だ。
だけど戦う気持ちは俺のものだ。
戦場をながめてるだけなんて耐えられない。
敵の矢が刺さったまま死んでいく仲間を
ただ見送るために俺はトロイアに来たんじゃない。

アキレウス　敵がこの船に乗り込んで来ない限り、
俺は戦わないと言ったが、
火の手がそこまで迫ってる。
どうやらそのときだ。
パトロクロス、俺の部隊と鎧をおまえに預ける。
この禍を遠ざけて来い。

パトロクロス　アキレウス……。

アキレウス　（ほかの兵士／コロスに命じて）誰でもいい、
いますぐ俺の鎧と武具一式を仕度しろ。

アキレウスの部隊は全員、
出撃の準備にかかれ。

パトロクロス　ありがたい。

アキレウス　故郷へ凱旋する希望が砕かれる前に
ヘクトルたちを追い払え。
だが、言っておく。
おまえがアキレウスの名誉と栄光を重んじるなら、
この約束を忘れるな。

パトロクロス　ああ、重んじる。
アキレウスの名誉と栄光は、俺の名誉と栄光だ。

アキレウス　ヘクトルを遠ざけたら、戦いはそこまでだ。
戦闘をやめて戻って来い。
たとえ戦場の熱気が駆り立てようと、
深追いはするな。

パトロクロス　ああ、約束する。
アキレウス　その先はほかの部隊に任せればいい。
パトロクロス　わかった。
アキレウス　急げ。炎を鎮めて来い。

アキレウスの武具一式が運ばれて来る。
パトロクロス、アキレウスの甲冑に身を固める。

パトロクロス　アキレウス、すまないけど、
この槍は、俺には重たすぎる。
ケイローンの槍を使いこなせる戦士は、
アキレウスをおいてほかにいないというのは、
やっぱり本当だ。
あと少しで完全におまえになれたのに……。

アキレウス　心配するな、ケイローンの槍はなくても、
おまえの戦車にはギリシア一の御者をつけ、
永遠の命を持つ神の馬と、
風となって走る天の馬をつないでやる。

アキレウス、儀式用の杯をとりだし、
清め、葡萄酒を注ぐ。

アキレウス　（祈って）全能なる神ゼウスよ、
わが僚友パトロクロスが勝利をおさめ、
すべての戦士とともに無傷で戻って来られるよう、
格別のご加護を与えたまえ。

パトロクロス　これ以上、ヘクトルの勝手にはさせない。
行くぞ。

第12場　『憤死』

コロスとパトロクロスの掛け合いによる。

パトロクロス　俺が率いたアキレウスの部隊は、
前触れもなくトロイア軍に襲いかかった。
コロス　戦車の上に立ち上がる青銅の甲冑！
パトロクロス　俺は十二の町を破壊し、十一の町を焼きつくした男！
コロス　女神から生まれたギリシアの最強戦士！
パトロクロス　敵が恐怖に凍り付いた音がした。
コロス　一番槍が最前線の将軍に命中。
パトロクロス　目前に死へのとば口が開いたのを見て、
やつらは船に火をかけるのをあきらめた。
コロス　狼に追われる羊のように散っていく。

パトロクロス　俺は敗走する兵士が一番多いところへ飛び込んだ。
コロス　剣を抜き、手当り次第、斬る！　斬る！　斬る！
パトロクロス　だが、俺の狙いはヘクトルひとり！
どこにいる！
コロス　どこだ、ヘクトル！
パトロクロス　あいつは戦場を自由自在に動き回る。
味方といるべきか、味方を見捨てるべきか、
コロス　隠れるべきか、躍り出るべきか、
パトロクロス　ヘクトルはすべてを心得てる。
コロス　どこだ、ヘクトル！
パトロクロス　壕を渡るのに手間取り、
土の谷間で混乱する一群を見下ろした。
コロス　あのなかにヘクトルがいる！
パトロクロス　俺は敵の前方に先回りし、

船陣のほうへ逆戻りさせるように追い込んだ。
コロス　敵を取り囲め！　皆殺しにしろ！
パトロクロス　命令を下しながら、
敵を片っ端からなぎ倒した。
コロス　トロイア第二の武将サルペドン。
パトロクロス　俺はそいつの胸を突き刺した。
コロス　地べたに倒れ込む敵の巨体。
パトロクロス　肉の塊に足をかけ、槍を引き抜いた。
コロス　そこから飛び出すどす黒いはらわた。
パトロクロス　サルペドンは鎧の下の俺に気づいた目をして、
その一瞬あとに息絶えた。
コロス　遺体に敵が群がって来る！
パトロクロス　こいつの血の匂いがおびき出してくれると思った。
ヘクトルが来るはずだ。

コロス　ヘクトルが来た！
パトロクロス　俺の後ろにはアキレウスの部隊、
コロス　ヘクトルの後ろにはトロイア軍、
パトロクロス　遺体を挟んで、両軍が戦列を整えた。
つぎの瞬間、鎧のぶつかり合う音が響き渡る。
激烈な死闘が始まった。
サルペドンの死骸は血糊と土埃で、
もう誰のものともわからない。
ところが突然、ヘクトルの号令で戦闘が止んだ。
コロス　城へ向かって走りだすヘクトル。
パトロクロス　どうした、ヘクトル！
敵の砦に火を放ち、
勝利を目前にしての戦闘放棄。
コロス　なぜだ！　ヘクトル！

パトロクロス　俺はためらうことなくやつを追った。
壕を渡り平原を越えてトロイア城へ！
そびえ立つ堅牢な城壁が迫って来る。
スカイア門に待ち構える防衛部隊。
俺は突進を三度繰り返した。
四度目の突進を試みようとしたとき、
コロス　ついにヘクトルが現れた！
パトロクロス　獲物は味方を轢き殺さんばかりの勢いで、
最後方から一気に躍り出た。
そこでようやく俺は我に返った。
コロス　戦闘の真んなかにいる！
パトロクロス　いや、ここは敵陣のど真んなかだ。
コロス　背後から迫る土埃！
パトロクロス　足下に影を感じた。

その瞬間、土の混じった空気を切り裂く音が、
背中越しに聞こえた。

パトロクロス、敵兵／コロスの槍に背中を突かれる。

パトロクロス

！

そんなことは、あってはならない。
女神の血を引く英雄の兜が、
戦場の土の上に転がるなんて。
誰だ、俺を刺したのは……。
まだ子どもじゃないか……。

パトロクロス、数歩歩いたところで、力尽きる。
ヘクトルが近づき、

パトロクロスの鎧の隙間に槍を突き立て、
ひと突きする。

ヘクトル　パトロクロス、
おまえは本気でトロイアを落とせると思ったか？
アキレウスの甲冑であざむき、
女と財宝を奪って帰るつもりだったか？
だがこれでわかったろう、
トロイアはこのヘクトルが守ってる。
ギリシア人よりはるかに勇猛な男たちが守ってる。
おまえは終わった。
アキレウスがどんな力を持っていようと、
おまえを救うにはもう手遅れだ。
禿鷹の餌（えじき）になれ。

パトロクロス　なんとでも言うがいい。
きょう勝ったのはおまえだ、気の済むまで勝ち誇れ。
しかし俺が死ぬのは、これが運命だからだ。
神々が死に場所を定め、幼い兵士の槍を使い、
最後の最後、おまえに止めを刺す役目を与えただけだ。
おまえの手柄でもなんでもない。
おまえはただ運命の手先にすぎない。
いいか、忘れるな、
いまや死人同然なのは、おまえだ、ヘクトル。
かりそめの命、必ずアキレウスが奪いに来る。
その運命からは逃げられない、絶対に。
ヘクトル　もう黙れ。（さらに、槍を刺す）
アキレウスの見事な鎧。
死に様を自ら選びとったかのような、

誇らしげな顔。
英雄になったつもりか？
生憎、俺はおまえに安らかな死を与えるつもりはない。

ヘクトル、深々と刺さった槍を、
パトロクロスの体から引き抜こうとする。
すると、体ごと持ち上がり、槍が抜けると同時に、
パトロクロスは再び地面に叩きつけられる。絶命。

ヘクトル　鎧を剥ぎ取れ！

コロスたち、パトロクロスの体から、
アキレウスの鎧を剥ぎ取る。
ヘクトル、モノローグ。

ヘクトル

誰だ、俺を見てるのは！
人間のものとは違う、なにかの目。
わかった……パトロクロスの戦車につながれた、
アキレウスの馬。
なぜまだそこにいる？　逃げないのか？
永遠の命を持つ神の馬が、
人間の最期を見て涙を流すのか？
神々が気まぐれに操る運命を、
おまえたちは涙して見送るのか？
肉体の痛み苦しみを知らぬおまえたちが、
人間の死を悼むのか？
ならば、よく覚えておけ。
死ぬべき運命にあるもののなかで、
人間ほど悲惨な生き物はない。

さあ、走り去れ。
この屍のためにまた次の殺し合いが始まる。
そして今度は、あの男を乗せて来い。
アキレウスをこの戦場に！

第13場　『慟哭』

アキレウスの船陣。

アキレウス　母上、恐ろしくてなりません。
パトロクロスがヘクトルを追っていきました。
俺の目の届かないところまで深追いしてしまった。
どうかパトロクロスを呼び戻してください。

コロス（テティス）　戦場から伝令が届いても、
その知らせをおまえに伝える役目は
誰も引き受けないでしょう。
ですからわたしの口から言いましょう。

アキレウス　なんです、その知らせとは？

コロス（テティス）　おまえの友は殺されました。

若い兵士が背中を突き刺し、
最後にヘクトルが槍を突き立てたのです。

アキレウス　！

コロス（テティス）　鎧は剥がされ、
ヘクトルが持ち帰りました。
死体はまだ土の上で血を流しています。
禿鷹に腸（はらわた）をえぐらせたあと、
兵士たちが城へ運ぶつもりです。
九日間、さらしものにするために。

アキレウス、声を上げて泣き出す。
地面に倒れ込み、両手で土を掻きむしって、
顔や体に塗り始める。

コロス（テティス）

お聞きなさい、アキレウス。
ゼウスはおまえの望みどおり、
ギリシアを苦しめています。
おまえの友の運命もまた、
ゼウスが定めた計画です。

アキレウス

母上！
俺はたしかにゼウスの力を頼りました、
トロイアに加勢をし、
ギリシアを窮地に陥れるようにと。
しかし、愛する友を失ってしまっては感謝もできない。
パトロクロスの命は俺の命より重いのです。
なのに助けてやることもせず船のなかにいた、
最強の戦士と言われる俺が怒りに狂わされ、
自分を縛り付けていた。

ですがもう、出て行かなくてはなりません。
ヘクトルと戦わずにはいられない。
コロス（テティス）　アキレウス、覚えていますか？
あなたに与えた予言。
もしも戦場へ出て戦えば、
二度とギリシアに帰ることはなく、
ここで死ぬ。
アキレウス　俺の命が短いことはわかっています、
ですが母上、死ぬ前に俺自身の手で、
ヘクトルを終わりにしてやりたい。
それができなければ、
生きている意味がありません。
コロス（テティス）　予言は必ずそのとおりになりますよ。
アキレウス　いずれは死ぬべき人間です。

怒りの殻のなかで、
腐るのを待ちながら生きたくはない。
俺が戦場に出て行くことを許してください。

コロス（テティス）　わたしはおまえを止めません。
まもなくわが子の命がついえることを覚悟しましょう。
けれど忘れないで。
どんなにわたしが微笑んでいるようにみえても、
わが子の命のはかなさに耐えるのは、
身を焼かれるより辛いのです。
その辛さには神も人間もありません。

アキレウス　お許しください。
ヘクトルを倒しに行かなければ、
この悲しみと怒りに押し潰されてしまいます。

コロス（テティス）　戦場に出るのはあしたになさい。

いま、おまえには鎧がありません。
炎の神に言って、朝までに新しい鎧を作らせましょう。
ずっとおまえを守ってやれたらいいけれど。
せめてわたしにできることを。

アキレウス　新しい鎧はありがたい。
ですが、パトロクロスの亡骸（なきがら）を、
少しでも早く取り戻したい。
ならば鎧がなくてもできます。

コロス（テティス）　いま、その高台に上がって、
トロイア軍におまえの姿を見せるのです。
恐怖に敵の足が止まるうちに、
味方が遺体を持ち帰れるでしょう。

アキレウス、戦場を見晴らす高い場所へ。

三度、雄叫びを上げる。

アキレウス　うおおおおお！
うおおおおおお！
うおおおおおお！

（歌）

カサンドラ　人は　なぜに　戦う
怒り　栄光　運命
人は　なぜに　戦う
怒り　栄光　運命

第14場　『和解』

ギリシア連合軍の船陣。
アガメムノンのモノローグ。

アガメムノン　雄叫びが兵士たちの耳に届いた。
アキレウスの体が怒りの炎を上げ、
黄金の雲のごとく輝くのを、俺は見た。
トロイア軍は二度目の雄叫びで凍りつき、
三度目を聞くと一目散に城のなかへ逃げ込んだ。
アキレウスは戦場に出ることもなく、
ギリシア連合軍を滅亡の危機から救った。

パトロクロスの遺体が、

コロスたちによって運ばれて来る。

アガメムノン　（モノローグの続き）

鎧を剥がされたパトロクロスは、
柔らかな麻布にくるまれて戻って来た。
アキレウスは妻を亡くした夫のように
その亡骸（なきがら）にすがりついた。
ただのひとりの若者でさえ、
戦場でしかるべき死を受け入れたときには
神になることがある。
パトロクロス……その名を持つ青年が、
この朝、神となっていくのを、俺はみた。

コロスたち、

アキレウスの脇に、新しい武具を運ぶ。

アガメムノン　（モノローグの続き）

俺は戦場で理解した。
神々は地上の出来事を、哀れむのと同時に楽しんでいる。
アキレウスの鎧が奪われていくのを
高見で見物していたかと思えば、
職人たちに奇跡の力を与え、
ひと晩のうちに見事な武具を作らせる。
これを身につけ戦いたいと思わぬ戦士がいるだろうか。
神々はこういう仕業によって、
思いのままに人間を動かしている。

アキレウス、アガメムノンに向かって。

アキレウス　アガメムノン、俺たちの間違いを正したい。
全軍を集め、俺とともに戦うよう命令を下してほしい。
俺はいま、確執のすべてを忘れ、戦闘に復帰する。

アガメムノン　それは本気か？

アキレウス　俺が怒りの感情に囚われなければ、
これほど多くの味方が大地に倒れ、
黒土を噛んで死ぬことはなかった。
生きたままのヘクトルを、
二度とここに近づけないことを約束する。

アガメムノン　よく言ってくれた！
おまえから戦利品を取り上げたのは、
神々に惑わされたゆえの過ちだった。
われわれを愚か者に変える女神の足はすばやく、
瞬時にとりついては狂わせる。

あの日は俺が正気を奪われていた。
きょうは過ちを償いたい。
おまえが望む限りの恩賞を与えよう。
いまはそんなことに時間を割くより、
決戦の準備にかかりたい。

アキレウス

オデュッセウス、ふたりのやりとりを聞いていて。

それは無理だ、アキレウス。
休息も食事も与えず、
兵士を戦場に出すことはできない。

オデュッセウス

いまならまだヘクトルは混乱してるはずだ。
こちらが有利なうちに攻め込む。

アキレウス

だめだ、兵士たちは休ませる。

オデュッセウス

おまえも恩賞を受け取り、ブリセイスを取り戻せ。

アキレウス　パトロクロスが復讐を待ってる。
俺が欲しいのは恩賞ではなく、敵の血だ。
殺して、殺して、殺し尽くし、
ヘクトルの息の根を止める、
求めるのはそれだけだ。

オデュッセウス　敵を倒すことにかけてはおまえに従う。
だがしかし、策を練ることに関しては、
俺の言い分を聞いてもらいたい。
飢えと疲れに耐えることが死者を悼むことになるのか？
肉体を回復させることも戦いのうち。
兵士たちには、
腹を空かして戦場に出てはならないと命じる。

アキレウス　ものが喉を通るというのなら、

そうさせるがいい。

オデュッセウス　アガメムノン、厳粛な誓いを立て、
アキレウスにブリセイスを返してくれ。

アガメムノン　ああ、そうだな。
（両手を天に掲げて）ゼウスと、大地と、太陽と、
戦闘の女神たちにかけて誓おう。
ブリセイスという女、
ただの一度もわがものとすることなく返還する。

オデュッセウス　いいだろう。
たったいま、アガメムノンとアキレウスが和解を遂げた。
決戦に備え、十分な休息と食事だ。

アガメムノンのモノローグ。

アガメムノン

誓ったことはけして嘘ではない。
あの美しい女の心は俺のものにできなかった。
肉親はギリシア人に皆殺しにされ、
ブリセイスひとりが生き残ったが、
魂はすでに家族と一緒に冥府へ旅立っていた。
たとえ奴隷の身となっても、
魂が征服者のものになることはありえない。
俺にはそれがわかる。
女は、自分を巡ってアキレウスと俺の確執が始まり、
パトロクロスが犠牲になったと知ってまた泣いている。
人間は生きているだけで悲惨な出来事にめぐり逢う。
奴隷の女も、征服者の総大将も、それは変わらん。

アキレウスはその場を離れ、出陣の仕度をしている。

アガメムノン　（モノローグの続き）
アキレウスは取り戻した女を抱きもしないで、
新しい鎧を身につけ、ケイローンの槍を持ち、
そして最後に楯を手にした。
そこに施された彫刻は、大地と、海と、川。
天空の星々と、人間たち。そして生ける者と、死せる者。
すなわち宇宙のすべてを握って、
アキレウスは戦場へ向かおうとしている。

アキレウスのモノローグ。

アキレウス　パトロクロスを救えなかったのは俺のせいだ。
アガメムノンに抱いた怒りの何百倍もの怒りを、
俺は、俺自身に向けている。

だが、それだけではまだ足りない。
ブリセイス、おまえの怒りも、
アキレウスに向けるがいい。
……。

コロス（神の馬たち）
不死身の馬よ、俺を復讐の地に乗せて行け。
アキレウス、
おまえの望みどおり、
風のごとく走ってやろう。
おまえを復讐の地へと運んでやる。
しかし、おまえの運命は
わたしたちよりはるかに速く、
一直線に、
死に向かっていくだろう。

アキレウス
行くぞ。

アキレウス、神の馬の戦車に乗り込み、
ギリシア連合軍を率いて、戦場へ向かう。

第二幕

第1場　『大殺戮』

トロイアの平原。

コロス　女神オーロラが作り出す夜明け。
黒い大地の上に浮かび上がる、
何千もの甲冑の列。
その先頭にアキレウス、
死ぬべき運命を覆す勢いで現れる。

アキレウス　出てこい、ヘクトル！

コロス　この日、神々は、
アキレウスの怒りをおそれ、
人間たちの戦争に介入する。
トロイアの守護神アポロンは、

プリアモス王の一族、アイネイアスの味方につく。

アキレウス　アイネイアス！
おまえは俺の相手ではない！
下がれ！

コロス　アキレウスの槍！
アイネイアスがひるむ！

アキレウス　俺を倒せば王位を譲るとでも言われたか？
だがプリアモスには五〇人の王子がいる、
おまえに王座がめぐって来ることはない。

コロス　アキレウスの剣！
アイネイアスに襲いかかる！
そのとき海の守護神ポセイドンが、
アイネイアスを救う。
アキレウスの目に神秘の靄（もや）。

アイネイアスの姿が消える！

アキレウス　誰が邪魔をする！
きょうトロイアに肩入れする神々があるならば、
アキレウスと戦うことを覚悟してもらおう。
この手足が動く限り、
すべての敵を冥府に送る。

コロス　その言葉どおり、
神をも恐れぬアキレウス、
ケイローンの槍を振るい、
兵士たちを殺戮する。
真正面からイピティオンを！
頭蓋骨が真っ二つ！
真横からデモレオンを！
兜を貫き脳をえぐる！

逃げるヒッポダマスを背後から！
牛のように背中を切りさばく！
プリアモスの王子たちは、
アキレウスにとって格好の獲物。
ポリュドロスにも容赦なく、
槍が襲う。
あふれだす内臓を両手で押さえながら、
崩れ落ちるポリュドロス。
その遺体を踏みつけながら、
ギリシア人の戦車が進軍する。
幼い弟の無惨な死を見て、
理性を失ったヘクトル、
前線に飛び出す。

ヘクトル　よくも、アキレウス！

コロス　アキレウスの鎧！
パトロクロスから奪った英雄の鎧！

アキレウス　逃げ隠れするな、ヘクトル！
もっと近づけ！　俺の前に！
パトロクロスの血の償いをさせてやる！

ヘクトル　おまえの槍の力はよく知ってる。
しかし、きょうの勝利がどちらのものか、
計画は神々の膝の上にある。
すべては運命次第！

コロス　ヘクトルの槍！
アキレウスを襲う！
わずかに届かず地面に刺さる！

アキレウス　戦闘の女神は俺についてる。
終わりだ、ヘクトル。

コロス　アキレウスの槍！
ヘクトルを襲う！
そのとき、トロイアの守護神アポロンが霧を放ち、
アキレウスの視界を奪う。
アキレウスは霧のなか！
ヘクトルが逃げる！

アキレウス　犬め！
神を頼って逃げ続けるがいい。
そのあいだ、おまえの味方が死んでいくだけだ。
トロイアの兵士はひとり残らず、
俺が殺す！

アキレウス、ますます獰猛に敵に襲いかかる。

コロス　首への一撃！
膝を！
腹を！
槍で！
剣で！
突き刺し！
切り裂く！
逃げ出す兵士！
その胴体を！
真っ二つに！
命乞いする兵士！
その頭蓋骨を！
粉々に！
地面に転がる無数の鎧、

泉のように噴き出す血。
枯れ野を燃き尽くす炎のごとく、
黒い大地を真っ赤に覆っていく。
逃げるトロイアの兵士。
平原を流れるスカマンドロス河を渡る。
たちまち河の水が赤く染まる。
河の神スカマンドロス、
凄まじい血の量に驚き、
アキレウスの前に姿を現す。

コロス（スカマンドロス）　『アキレウス、
どこまでわたしの河を赤く染めるつもりか？』

アキレウス　プリアモスの息子たちが
おまえの河に逃げ込んだ。
パトロクロスに捧げる生け贄として

若い王子を十二人生け捕る。

コロス（スカマンドロス）『ならばそれをすませて早く立ち去れ。
わたしの河を血で汚（けが）すことは許さぬ』

アキレウス　いや、その生け贄以外はすべて殺す。
もしもおまえがかくまうなら、
おまえの河が墓場になる。

コロス（スカマンドロス）『なんとおぞましいことを。
見よ、プリアモスの王子リュカオン。
槍も振るえぬ幼い子どもにすぎぬ。
おまえに慈悲を求めている』

アキレウス　無駄なこと！
パトロクロスがヘクトルに殺される前ならば、
俺にも慈悲の心があっただろう。
だが、いまは違う。

コロス　アキレウスの剣！
リュカオンの首を裂く！
プリアモスの王子を殺した！
『なにをする、アキレウス！』
コロス（スカマンドロス）　パトロクロスはもっと惨たらしく殺された。
アキレウス　ヘクトルがどんなに逃げようと、
どこまでも俺が追いつめて、
悲惨な死を与えてやる。
それがパトロクロスが受けた仕打ちの報いだ。
コロス　アステロパイオスを殺した……。
テルシロコスを殺した……。
アステュピロスを殺した……。
トラシオスを殺した……。
アイニオスを殺した……。

オペレステスを殺した……。
名もなき兵士を殺した……。

コロス（スカマンドロス）　『アキレウス、
これ以上わたしの河に屍を浮かべることは見過ごさぬ。
河よ、渦を起し、トロイア人をかくまえ。
河よ、大波となって、アキレウスを飲み込め。
神霊を恐れよ、アキレウス！
わたしがおまえの墓となる。
誰もたどりつけない水の奥底へ、
おまえを沈めて眠らせよう』

アキレウス　母上！　ここが俺の死に場所ですか！
栄光を手に入れる前に運命は尽きるのですか！
まだ復讐は終わってない！

コロス（スカマンドロス）　『沈め、アキレウス！』

コロス

波がアキレウスを飲み込もうとしたとき、
平原に巨大な炎の壁が現れる。
炎の神ヘパイトスがアキレウスの味方につく。
草木と屍を焼き尽くし、
スカマンドロスの大波に襲いかかる。

コロス（スカマンドロス）

『わたしの河が沸騰する、
魚たちが焼けた水から跳ね上がる。
スカマンドロスの河が燃えるなどと、
一体誰が想像したことか。
これがゼウスの計画というならば、
わたしもトロイアを救うのはよそう。
炎の神よ、ゼウスに伝えよ。
人間たちの戦いには二度と手は出すまい。
穏やかな流れに戻ることを誓う。

聞き届けたなら、火の手を鎮めよ』

コロス　炎の壁はとたんに消え去り、
スカマンドロスの大波も退(ひ)いていく。
焼けた水から逃げ出した魚たち、
それはあたかも、
焼ける城から逃げ出すトロイア人を思わせる、
ゼウスが示した滅びの兆し。
アキレウスは立ち直り、
再びトロイア軍を追いつめていく。
城に向かって逃げる兵士の群れ。
スカイア門の上にプリアモス。
敗走するわが子らを迎え入れる。

第2場　『死闘』

アンドロマケのモノローグ。

アンドロマケ　わたしはそのとき、
まだアキレウスの復帰さえ知らずに、
宮殿の奥の部屋で機を織っていました。
花模様のついた赤紫の大きな布を。
夫に言いつけられたとおり、
つとめてふだんと同じように、
女たちと仕事をしていたのです。

トロイア城、スカイア門の塔の上。

プリアモス　わが衛兵たちに告ぐ！
アキレウスが攻めて来る！
味方の最後尾が入り次第、即座に門扉を閉じよ！
けしてアキレウスを入れてはならん！

カサンドラ　（プリアモスに）お父さま、
アキレウスは城には入って来ないわ。
ヘクトルが迎え撃つから。

プリアモス　ありえん。
一対一で倒せるものか。
ヘクトルといえど、戦えば殺される。

カサンドラ　ヘクトルは一番後ろ。
すべての兵士を逃がしたあとで、
アキレウスと戦うつもりだから。

プリアモス　ヘクトル！

アンドロマケ　（モノローグ）わたしは侍女たちに言って、
釜に火を入れさせました。
夫が戦場から戻ったらすぐお湯につかれるようにです。
でもちょうどそのころ、
夫の運命は女神アテナの手のひらに、
委ねられたところでした。

プリアモス　ヘクトル、逃げてくれ。
アキレウスと戦ってはいかん。

ヘクトル、スカイア門の外から。

ヘクトル　どうか、城門をお閉めください、父上！

プリアモス　（涙ながらに）これ以上息子を失いたくはない。
おまえは殺されてはならん、生き延びるのだ。

生きてトロイアを守ってくれ。

ヘクトル　あなたの息子はきょう、
アキレウスから逃げるわけにはいきません。
トロイアを守るためです、
敵と戦う名誉をお与えください。

プリアモス　おまえたちは戦場で
誇りを持って死んでゆけるだろうが、
女や幼な子たちはそうではない。
城門を破られようものなら、
無惨に荒らされた王宮で恥辱を受ける。
そしてこの老人は槍で刺され、見せしめにされるだろう。
乾いた土を噛みながら、
犬たちに食いちぎられて死んでいくのだ。
死すべき運命にある人間にとって、

それほど無惨な死に様はない。
ヘクトル、家族をあわれに思うなら、
どうか生き延びてくれ。

ヘクトル　父上、敗北とお決めになるのはまだ早い。
神々はどちらを生かすか、
心変わりをするかもしれません。
いや、まだ決めかねているのかもしれない。
カサンドラ、俺はアキレウスを迎え撃つ！
父上をたのむ！
衛兵よ、城門を閉じろ！

カサンドラ　兄上に栄光を！

プリアモス　ヘクトル！

トロイア城の城門が閉じられる。

ヘクトル　聞こえるか、カサンドラ。
いいや、聞こえてないほうがいい。
きょうも俺のせいで多くの兵士が死んだ。
俺が城のなかへ逃げ込めば、
遺族の顔を見ることになる。
責めを受けるのは当然としても、
俺の名は恨みとともに末代まで語り継がれる。
その不名誉を思えば、たとえ命を散らそうと、
アキレウスに一騎打ちを挑むほうを選ぶ。
仮に和平を申し入れたところで、
もはや受けつける道理もない。
兜を脱ぎ、ヘレネを返しても同じこと。
アキレウスは俺の命を奪いにくる。
俺とやつのあいだにはもう、

恋人どうしのように交わし合う言葉はない。
血を流し合うことしか……。

カサンドラ　アキレウス……。

プリアモス　来たか。

カサンドラ　青銅の鎧が光の輪をなして迫ってくる。

プリアモス　兜に戴く羽飾り、
右肩にそびえるケイローンの槍。
あの姿は人間ではない、軍神アレス。

アンドロマケ　ヘクトルが殺される。
（モノローグ）城門を閉めさせたのは、
ヘクトル自身だったと聞いています。
アキレウスが迫ると、
夫の体ははげしく震えだしたそうです。
とおに覚悟していたはずなのに、

スカイア門の上からもわかるほどに。

カサンドラ　父上、奥にいらしてください。
ここはわたしが見守っているから大丈夫。

プリアモス　構わん。
ここにいよう、ここに。

アキレウス、城門の前にたどりついて。

アキレウス　勇敢なるギリシア連合軍の戦士諸君！
ついにヘクトルを追いつめた！
ここからは一対一で決着をつける！
けして誰も手を出すな！
功名にはやって矢を射かける者があれば、
このアキレウスに矢を放ったものとして罰する！

カサンドラ　ヘクトル、逃げて！

アンドロマケ　（モノローグ）いざアキレウスを目の前にすると、
ヘクトルは鷹に狙われた鳩のように、
逃げ出したのです。
神々は一体どんなおつもりで、
それを眺めていたのでしょう。
ふたりの勇者が競走馬のように、
城の周りを延々と疾走したと言います。

プリアモス　ヘクトル、城へ入れ。
父親の言葉がおまえに届く翼を持たぬなら、
母の乳房へ戻ってくれ。
妻と子の待つ臥所へ戻ってくれ。
わが子よ！
おまえを失うわけにはいかん。

アンドロマケ　（モノローグ）家族のどんな言葉も、
戦場には届かなかったのです。
ふたりは城の周りを三周しました。
四周目、ヘクトルがスカイア門に近づいたとき、
女神アテナのささやきがヘクトルを止めました。
ヘクトル　アキレウス、もう逃げはしない。
城の周りを三度巡って闘志を取り戻した。
この決闘に神々の立ち会いを求め、
決着がついた際の取り決めをしておきたい。
アキレウス　逃げ回るあいだになにを企んだ！
ヘクトル　もしも俺がおまえの命を奪ったときには、
その鎧一式は頂戴しても屍に恥辱は加えず、
ギリシアに返すと約束する。
同じことを誓ってほしい。

アキレウス

ヘクトル、おまえは勘違いをしてる。
取り決めなどと寝言はよせ。
獅子が人間に誓いを立てるはずがなく、
狼が子羊に心を通わせることはない。
思いは永遠に相手を倒すことのみにある。
戦うことだけを考えろ。
トロイア最強の戦士として、
すべてを賭けて戦うときがきたのだ。
いまからこの槍は女神アテナの導きにより、
おまえを仕留めるだろう。
おまえは殺した者たちの悲しみを、
すべてまとめて償うことになる。

アキレウス、ケイローンの槍を投げ放つ。

その槍はヘクトルの頭上を越えて地面に突き刺さる。

ヘクトル　神々はまだ、筋書きに勝者の名を刻んでいないようだ。
次は、おまえが俺の槍を受けろ。

ヘクトル、槍を投げ放つ。
その槍はアキレウスの楯に命中するが、
神の力を宿した楯を貫くことはできない。

アキレウス　勝者の名は自ら刻めと神々は言っている。
ヘクトル、剣を抜け。
これが最後の瞬間だ。

アンドロマケ　（モノローグ）アキレウスの言葉を聞くまでもなく、
ヘクトルはこの日のはじまりから、

そのときが来たことを悟っていました。
英雄として人びとに記憶されるために、
戦って死ぬために、
わたしの夫は剣を抜いたのです。

アキレウスとヘクトル、剣による死闘。
アキレウスの剣はヘクトルの肉を突き刺すために、
甲冑のわずかな隙間を探して軌跡を描く。
剣のぶつかり合う音が、
トロイアの大地に響き渡る。
ヘクトルがどんなに防戦しても、
勝機が巡って来ることはない。
やがて女神アテナが決着のときを決めるだけとなり、
最後が来る。

アキレウスの剣がヘクトルを追いつめると、
首が肩に繋がる柔らかなところに突き刺さる。
ヘクトル、倒れる。

アキレウス　まだ喉笛は切り裂いてない。
言ってみろ、ヘクトル、
パトロクロスを倒したときになにを思った？
ヘクトル　……。
アキレウス　俺が仇を討ちに来ると思ったはずだ。
ヘクトル　ああ。
アキレウス　おまえの望みをひとつでもかなえたら、
パトロクロスの復讐にはならない。
おまえの死骸は禿鷹と野犬に食いちぎらせ、
到底受け入れ難い最期を与えてやる。

ヘクトル　頼む、アキレウス。
このからだを野犬どもの餌（えじき）にするのはやめてくれ。
家族に返してほしい。
父と母は、死んだ息子の身の代として、
あらんかぎりの黄金と青銅を払うだろう。

アキレウス　俺にはなにも乞うな。
プリアモスがどんな財宝を持参しようと、
おまえの死骸が家族の涙に囲まれることはない。
ギリシアの船陣の片隅で、
野犬が肉片ひとつ残さず食い尽くす。

ヘクトル　ああ、たしかにその顔を見れば、
俺の頼みなど聞くまい。
怒りに満ちたおまえの心は赤く焼けた岩のようだ。
だが、覚えておけ。

俺を殺したことで、
いずれおまえ自身が神々の怒りを買うだろう。
トロイアの守護神アポロンが復讐する。
おまえにも死すべき日が……。
必ず来る……。

死が、ヘクトルを迎える。

アキレウス　運命が迎えに来るというなら、
俺はいつでも受け入れる。
おまえこそ、迷わず冥王の館へ向かうがいい。

アキレウス、ヘクトルの首から剣を抜く。
続いて、血濡れの武具を剥ぎ取る。

ギリシアの兵士／コロスたち、
ヘクトルの遺体に群がる。

コロス　これがヘクトルの体。
なんて端麗な。
なんて美しい。
しかしこの肉体に魂が宿っていたときには……。
ギリシアの船に火を放った……。
無数の兵士を殺した……。
パトロクロスをなぶり殺した……。
生きたヘクトルを思えば……。
大人しくなった……。

ギリシア連合軍の兵士／コロスたち、

ヘクトルの遺体に剣や槍を刺す。

アキレウス　ギリシア連合軍の戦士諸君！
きょうまでわれらに
無数の痛みと苦しみを強いてきたヘクトルを、
ついに討ちとった。

ギリシア連合軍の兵士たちによる勝鬨。

アキレウス　ヘクトルが死んだいま、
トロイア城を一挙に陥落させることもできる。
しかしわれらは戦友パトロクロスの弔いに、
ヘクトルのむくろを捧げる約束をした。
これより全軍、船陣へ引き返す。

アンドロマケのモノローグ。

アンドロマケ　ギリシアの男たちが鬨の声をあげるなか、
アキレウスは、なおも復讐の手を緩めませんでした。
息絶えた夫の足首をつかみ、
踵とくるぶしのあいだに短刀を突き刺すと、
穴を開けたのです。
そこに牛革の紐を通して戦車に結びつけ、
逆さ吊りにしました。
頭を引きずるように仰向けにして。
それから戦車に乗りこみ、馬に鞭を加えました。
舞い上がる土煙。
ばらばらに乱れた黒い髪。
血と砂にまみれてゆく秀麗な顔。

あまりにも無惨な光景でした。
それほどまでの仕打ちを
神々はなぜお許しになったのでしょう。
こんな最期がふさわしいと言えるほど、
夫は悪業をなしたのでしょうか。
ギリシアの軍隊が土埃の向こうに消えると、
最愛の息子を殺された父親の嘆きだけが残りました。
わたしはヘクトルを抱きに行く。
アキレウスの船陣へ行ってくる。
あの男は息子たちの命をいくつ奪った。
これほど奪ったのだ、
ひとりの親としてわたしを哀れむこともあるだろう。
あの無法者にも老齢の父親がいると聞く。
愛する息子の亡骸（なきがら）をこの手に抱きたいという願いを、

プリアモス

どうして無碍(むげ)にできようか。
アキレウスに会うよりしかたがない。
わたしはヘクトルを抱きに行く。
止めるな……誰もわたしを止めてはならん。

トロイア城の者たち／コロスたち、
嘆き悲しむプリアモスを押しとどめる。

アンドロマケ　（モノローグ）嘆きに包まれたトロイア城で、
わたしは、ただ呆然とこの子を抱いていました。
アステュアナクスというこの子の名前は、
トロイアを守るただひとりの男を意味します。
それはあなたの息子だからこそ授かった名前です。
なのにこれからは、土地も、家も、下着一枚も、

剥ぎとられる恐怖に怯えて生きなければいけません。
せめて最期の言葉を聞けていたらと思います。
あなたはいま、アキレウスの船の脇に
横たわっているのでしょう。
言われたとおりあなたのために織っていた、
美しいチュニカを着てもらうことができません。
あのチュニカを火にかけます。
あなたの体がここになければ、
それがわたしにできるただひとつの儀式です。
そして生涯、わたしは語り継ぎます。
ヘクトルがトロイアを守るために戦ったことを。
後の世のすべての人がヘクトルの名を誇りとし、
ヘクトルの名に尊敬と愛情を寄せるように。

第3場　『亡霊』

ギリシア連合軍の船陣。
アキレウス、パトロクロスの遺体に近づく。

アキレウス　パトロクロス、
約束どおりヘクトルを倒してきた。
死肉を野犬に食らわせ、
プリアモスの息子たちの首をおまえに捧げる。
冥王の館で安らかに過ごせ。

アガメムノン　盃をとれ、アキレウス。
その顔の血糊も洗い流せるよう、
湯を沸かしてある。

アキレウス　いや。パトロクロスの埋葬が終わるまで、

俺は湯水を浴びることはしないとゼウスに誓った。
その仕度は無用だ。

アガメムノン　気の済むようするがいい。
だが食事もとらないとは誓ってないはずだ。
きょうは敵将を打ち倒した祝いの日でもある。
おまえが不屈の勇者であることは
万人の知るところだが、
今晩は食事に屈してみてはどうだ？

アキレウス　食事もいらない。
その代わり頼みがある。

アガメムノン　言ってみろ。
おまえの働きにはなにを与えることも惜しまない。

アキレウス　火が欲しい。
パトロクロスが暗い闇路を迷わず進めるように、

手に入る限り薪(たきぎ)を用意してもらいたい。
疲れを知らぬ炎のなかで、
この亡骸を少しでも早く送り出したい。

アガメムノン　わかった。
望みどおりにしよう。

アキレウス　ありがたい。

アガメムノン　しかし、今夜は戦士たちに、
酒と料理をふるまうことにするが、
異存はあるか？

アキレウス　いや。そうしてくれ。

アキレウス、砂浜へ。
波音を聞きながら眠りに落ちかける。
そこへ、パトロクロスの亡霊が現れる。

パトロクロス　眠ってるのか、アキレウス。
アキレウス　！
パトロクロス　俺のこと、忘れたいと思ってるんじゃないだろうな？
生きてるあいだはあれほど気にかけてくれたのに、
死んでしまえばそんなものか？
アキレウス　パトロクロス……。
パトロクロス　だったら冥府の門をくぐれるように
とっとと葬儀を済ませてもらいたいもんだ。
亡者の幻に行く手を阻まれ、
先に進めなくて困ってる。
アキレウス　……。
パトロクロス　生まれついての運命が、
突然ぽっかり大口を開けた感じだ。
ヘクトルが俺を殺し、

おまえがヘクトルを殺した。
それでおまえに運命が近づいた。
本当にすまないことをした。

アキレウス　あやまるな。
おまえが死んだのは俺のせいだ。
言ってくれ、俺にできることならなんでもする。

パトロクロス　頼みがあるんだが、
できるものなら、俺の骨を、
おまえと同じところに埋めてくれないか。
おまえの母上がくれた、
ふたつの把手がついた黄金の壷があっただろ、
あれに入れて、どこかギリシアの土に。
こんなこと、生きてるあいだは思いもしなかった。
死んだらもう、みんなとしゃべったり、

飲み食いできないとわかって、
急にそうしてほしくなった……。

アキレウス　おまえはそんなことを言いに来たのか？
それくらい簡単だ。

パトロクロス　ほんとうか？
でも、おまえも俺と同じように、
あの裕福なトロイア人の城の下で死ぬ。
ギリシアには帰れないじゃないか。

アキレウス　ああ……。

パトロクロス　昔、かっとなって仲間を殺してしまった俺は、
おまえの屋敷に連れて行かれておまえに仕えた。
人殺しの従僕を、
おまえは兄弟同然に扱ってくれた。
あれからずっとそばにいた。

だから、この世界では骨をひとつの壷に入れて、
懐かしい故郷の土に埋めてもらえたら。
そうしたら永遠でいられる。

アキレウス　骨は一緒に壷に入れよう。
誰かに託して、ギリシアに運ばせよう。
きっとできる。

パトロクロス　手を握らせてくれ。
埋葬されたら、二度と冥府から戻れない。
だから……。

アキレウス　もっと近くへ来い。届くところへ。
おまえの願いはなんでも聞く。
嘆きがあるなら、その嘆きもわけてくれ。

パトロクロス　アキレウス……。
俺は死んだ。

死んだんだよ。
真っ暗だ。

アキレウス　ああ、残念だ、パトロクロス。
残念だ。
俺の怒りがおまえを殺した。

パトロクロス　それはいいんだ、でも、あのトロイア城の向こうを
見ることができなかったのは心残りだ。
きっと見たこともないほど美しく、
豊かな町が栄えてるんだろうな。
神々がこんなに俺たちを苦しめ、
守ろうとする町なんだから。

アキレウス　そうかもしれない。

パトロクロス　それにひきかえ、
俺が行く冥府にはなにもない。

しゃべる相手も、一緒に飲み食いする仲間もいない。
俺だけひとりになる。

アキレウス　心配するな。
誰もおまえを忘れない。

パトロクロス　俺の葬儀はどんな葬儀になる？

アキレウス　全軍をあげて執り行う。
葡萄酒色の海を見渡す丘に祭壇を作って、
あらんかぎりの生け贄を捧げる。
この伸びた髪も切り落としてその手に持たせる。
なんでも一緒に燃やしてやる。
旅路をさまようことがないように俺の馬を献じる。
腹が減ることがないように一番太った羊をさばく。
それを食い尽くしたころ、
アガメムノンの料理番の料理を供える。

いつもおまえのそばにいた飼い犬も連れて行け。
戦士の血が疼くときのために、
トロイアの王子たちの首を焼く。
ただしヘクトルは焼かない。
やつのむくろは戦車にくくりつけ、
葬儀の炎が絶えるまで引きずり回しておまえを弔う。
それが済んだら野犬のえさだ。

パトロクロス　そんなにしてもらえたら、
むこうへ行っても不安はない。

アキレウス　冥府へ行ったら機嫌良くしていろ。
嘆きはすべて置いていけ。

パトロクロス　でも、アキレウス、
俺は生きてるうちになにを残せただろう？
いつか戦争が終われば、

ヘクトルに殺された男のことなんか、
みんな忘れてしまうだろう。
十年経って、百年経って、千年経ったら、
パトロクロスのことを憶えてる人間なんて、
誰ひとりいなくなる。
俺はそれが怖い。
もしも俺の骨がアキレウスの骨とひとつの壷に入って、
ギリシアの土に埋めてもらえるとしたら、
なにかを残したことになるかもしれない。
いや。でも、それだって、
けして永遠じゃない。

アキレウス　パトロクロス、
誰もおまえを忘れない。
パトロクロス……。

アキレウス、目覚める。
その傍らに、オデュッセウス。

オデュッセウス　大丈夫か、アキレウス。
アキレウス　幻をみた！
オデュッセウス　パトロクロスの？
アキレウス　不運な友の魂が、
生きているときと変わらぬ声と姿で、
夜通し俺のそばにいた気がする。
オデュッセウス　葬儀の準備ができた。
みんなおまえの指示を待ってる。
アキレウス　ああ、わかった。
オデュッセウス　パトロクロスの弔いが済んだら、
哀しみを忘れて戦場へ戻ろう。

つぎの攻撃はトロイアを滅ぼす絶好の機会になる。
あるいは最後の戦いになるかもしれないが。

アキレウス　……。

オデュッセウスとアガメムノン。

アガメムノン　ヘクトルが死に、
アキレウスが戻ってきたいま、
もはや負けることはないはずだが。

オデュッセウス　つねにわれらは優勢だった。
にもかかわらず、この戦争は十年も続いた。
トロイアは守られてる。

アガメムノン　気まぐれな神々に。

オデュッセウス　そして、堅牢な城壁に。

アガメムノン　まったくだ。
ギリシアから遠征して十年、
ただの一度も、いや、たったひとりの兵士でさえ、
あの城壁の向こうを見ていない。
ヘレネを取り戻すどころか、
攻めるたびに援軍が現れ、堅牢な城壁に跳ね返される。
オデュッセウスよ、槍と剣ではもう、
トロイアを滅ぼせないのではないか。

オデュッセウス　俺も似たようなことを考えていた。
いままでと同じ戦いを繰り返していては、
この戦争は終わらない。
長く続く戦いに決着をつけることができるのは、
腕力の強い者ではなく、
新しい戦いかたを手にする者だ。

アガメムノン　終わらせてくれ、おまえの知恵で。
トロイアを滅ぼし、ヘレネを奪還し、
屈辱を晴らしてギリシアへ帰る。
どんなことをしてでも。

パトロクロスの祭壇の前にて、
アキレウス、長く伸びた髪を切り、死者に捧げる。
パトロクロスの火葬の煙。

第４場　『老王』

ヘクトルの死から九日後。
トロイアの王宮。
哀しみのあまり厩のなかを転げまわり、
汚物にまみれてもだえてきたプリアモス王。

プリアモス　どうしても行かねばならん……。
ヘクトルを取り戻しに、行かねばならん……。
カサンドラ　可哀想なお父さま。
すっかり正気を失ってしまわれて。
プリアモス　わたしはこの世で最も不幸な王となった。
ゼウスが下した悲運によって、
一番愛しい息子を失ってしまった。

正気でなどいられるものか。
おまえたちもまもなくこの悲しみを背負うのだ。
ヘクトルがいなければトロイアは守れぬ。
おまえの家族が殺される、
おまえの息子が殺されるのだ。

カサンドラ　わたしよ、お父さま。
不吉な未来を口にして、
家族に疎まれてきた娘。

プリアモス　知らん。
わたしの宝はヘクトルひとりだ。
あの子を軍神アレスに殺されたあとに
残ったのは腰抜けばかり。
おまえもわたしを引き止めに来たクズであろう。
用はない。立ち去れ。

カサンドラ　いいえ。聞いてください、お父さま。
わたしは止めたいんじゃない、
ヘクトルのことを伝えたいの。
お兄さまの亡骸はアポロンが守ってる。
アキレウスがどんなに遺体を引きずりまわしても、
体は傷ついていないの。
だから、どうかそれ以上心を痛めないで。
プリアモス　それが気休めでないとすれば、
奇跡を信じろと言うのに等しいではないか。
狂人め。
カサンドラ　お願い、信じて。
黄金のアイギスで守られてるの。
きれいな体のままでいる。
それにトロイアに同情してるのはアポロンだけじゃない、

ゼウスはお父さまのことを哀れんで、
亡骸を取り返しにいくようにと命じてる。
アキレウスの船陣へ行っても、
お父さまの命はゼウスが守ってくださるわ。

プリアモス　おまえが言ってることは本当なのか。

カサンドラ　そうよ。でも、兵士は連れて行かないで。
お父さま、これはゼウスからの伝言よ。
わたしを嫌っていても、どうか信じて。
ヘクトルの亡骸を取り返して来て。

プリアモス　予言と言えば、
いつも苦々しいものと決まっていた。
だが不幸のどん底に響くゼウスの言葉は、
はじめてわたしに希望をくださった。

カサンドラ　そのとおり。

お兄さまを取り返しに行くのに、
なにも恐れないで。
ゼウスに守られて行くのだから。

プリアモス　ああ、そうだ、どうしても行かねばならん。
誰か！　誰か！　城の者に命じる。
いますぐ宝物庫を開き、
ヘクトルの身の代とする宝をここへ運べ。

カサンドラ　でも、お父さま……。
ゼウスはヘクトルの亡骸を取り戻してはくれるけど、
トロイアを救いはしない。
オリンポスの最高神が愛したこの町は、
次の季節が訪れる前に滅びてしまう。
オデュッセウスの卑劣な作戦にだまされて、
焼き尽くされてしまう。

この予言はどうしても信じてくださらないでしょうね。

財宝が運ばれて来る。
アンドロマケ、登場。

アンドロマケ　お父さま、待ってください。
プリアモス　アンドロマケ、
わたしはアキレウスに会ってくるぞ。
ヘクトルの亡骸を引き取りに。
身の代として残った財宝をかき集めてゆくつもりだ。
アンドロマケ　おひとりで行かれるというのですか？
あなたの息子たちをことごとく殺した男に、
会いに行こうと？
プリアモス　ああそうだ、ゼウスがお守りくださる。

予言や占いを授かったことのないわたしだが、
今度ばかりはこの弱った耳にもはっきり聴こえた。

アンドロマケ　アキレウスはお父さまに
尊敬の念を示すでしょうか？
慈悲の心を傾けるでしょうか？
トロイアは英雄を失った上、
偉大な王まで失うことにはならないでしょうか？

プリアモス　もしもアキレウスの船陣で死ぬことが運命ならば、
わたしはそれを受け入れよう。
死ぬ覚悟はとおにできている。
だがその前に、わが子をこの腕に抱き、
涙が枯れるまで泣くことが望みなのだ。
それがかなえばたとえアキレウスに殺されても構わん。
（大声で）馬車を磨き、財宝を積み込め！

アンドロマケ

仕度を急げ！
（コロスに命じて）トロイア王が出発します。
ゼウスに捧げる盃を仕度なさい。
（プリアモスに）わたしは
お父さまに不吉を告げる鳥にはなりません。
あなたにとってかけがえのない息子は、
わたしにとってもかけがえのない人でした。
もしもわたしがトロイアの王なら、
なんとしてもヘクトルを引き取りにゆくでしょう。
お父さま、どうか愛する人の亡骸を
取り返してきてください。
万一それがかなわぬときでも、
どうかヘクトルを抱きかかえ、
わたしのぶんまで涙を流してきてください。

プリアモス　アンドロマケよ、必ずそうしよう。
約束をする。
アンドロマケ　（祈って）オリンポスにしろしめし、誉れ高きゼウスよ、
女神テティスより生まれたるアキレウスが、
トロイア王の嘆願を受け、
憐れみをもって迎え入れますよう計らいたまえ。
そして願わくは老王の道中、
あなたの最も優れた鳥を使わせ、
目指す敵陣の懐まで、心の頼りとして導かせたまえ。

ゼウスが使わす大鷲＝アルゴス殺しの神ヘルメス／コロスが、
プリアモスを導いていく。
命がけの夜道を行く。

コロス（ヘルメス）　老王よ、参りましょう。
今宵、闇の旅路をお供しますは、
ゼウスの使いにしてアルゴス殺し、
旅人の神にして盗人の神ヘルメスにございます。
人付き合いの良さと聞き上手を見込まれまして、
アキレウスの陣屋までの道案内、
つとめさせていただきます。

プリアモス　ゼウスが使わした神と言うのが真実ならば、
どうかありのままを話していただきたい。
息子のヘクトルは、まだ、
アキレウスの船のかたわらに横たわっているのか、
それともすでに手足を失い、
犬や鳥のえさとなってしまったのか。

コロス（ヘルメス）　いえ。不思議なことに、あの方のお姿は

討たれたときのまま、体は少しも腐らず、
犬も鳥も蝿一匹もたかっておりません。
この九日というあいだアキレウスが引きずりまわし、
そのたび傷だらけになっても、
傷口はきれいにふさがれています。

プリアモス　ああ、ありがたい。
ボイポス・アポロンのご加護でありましょう。

コロス（ヘルメス）　それは存じませんが。
神たるもの、あからさまに人間をひいきにしたとあっては
聞こえがよろしくない。
さて、このあたりで私はひっこみましょう。
あとはご自身の目でお確かめを。
アキレウスはあそこです。
なんとしてもあの男の心を動かすのです。

第５場　『対話』

アキレウスの船陣。

プリアモス、アキレウスのもとへ近づいていく。

アキレウス　プリアモスか？

プリアモス　いかにも。

アキレウス　ひとりでここへ？

プリアモス　ごらんのとおり。

まずは、ご挨拶を。

アキレウスの膝にすがり、その手をとる。

アキレウス　待ってくれ。

いまあなたが口づけしようとしているのは、
あなたの息子たちを殺した男の手だ。

プリアモス　こうするために来た……。

プリアモス、口づける。

アキレウス　トロイア王よ、
神に見まごう姿だ。

プリアモス　この手にヘクトルの亡骸を取り戻したく、
嘆願しに参った。
どうか、故国であなたの帰りを待つ
父上のことを想っていただきたい。
おそらくはわが子の存命を耳にするたび安堵し、
凱旋を心待ちにしているはず。

わが身を振り返れば、
戦争が始まる前にはこの広大なトロイアの地に、
五〇人の息子があった。
しかしいまではそのほとんどが死に、
トロイアの町を守らんと戦ったヘクトルは、
あなたの手に殺された。
わたしはその亡骸を家族の元へ連れ戻したい。
無償でというつもりはない。
トロイアに残った稀少な品を、
身の代として持参してある。
アキレウスよ、ご尊父を想い起こし、
この老いた父親を哀れんではくれないか。
地上に生を受けた者が、
いまだ誰ひとり耐えたことのない苦しみを

耐えている老人だ。
わが子を殺した男の手に接吻し、
慈悲を求める父親に免じ、
どうか……。

アキレウス　顔を上げていただきたい。

アキレウス、プリアモスの手をとり、
静かに押しやって、距離をとる。
ふたりの男はそれぞれに、
父、友、子を想う、その静寂。

アキレウス　どんな苦しみを味わえば、
それほどまで髪と髭が白くなるのか。
身の危険をかえりみず敵の船陣を訪れ、

息子たちを殺した男の前にひざまずく勇気、
一体どこからそれを得たのか。

プリアモス　プリアモスよ、
あなたの意志は鉄のようだ。
……こちらへ、腰を下ろしてくれ。

アキレウス　いや、わたしは座らない。
もう、苦しみという苦しみを忘れ去れ。
なにをしても消すことのできない哀しみは、
胸に寝かせておくしかない。
人間は苦しみとともに生きるように、
神々が運命の糸を紡いでしまわれたのだ。
ご存じか、
ゼウスの足もとにはふたつの壷があり、
ひとつには不幸、ひとつには幸福が入っている。

そこからとりだしたものを、
運命として人間に与えるという。
不幸の壷からとりだした運命を賜わった人間は、
蔑まれ、飢餓に苦しみ、
神々の庇護を受けずにこの世をさまよう。
ふたつが混ざり合った運命を賜われば、
禍福のあざなえる一生を過ごす。
俺の父親は多くの幸福を賜わったおかげで、
富においては万人にまさり、一国の王となって、
人間の男にして女神を妻にした。
だが、そんな父にも、
不幸の壷から賜った運命があった。
王位を継ぐ子がなかなか産まれず、
ようやくできた息子は、

人より早く世を去る運命をもっていた。
しかも、王位を継ぐどころか、
異国の戦場で死へと向かって進んでいる。
プリアモス王、あなたはかつて、
幸せに暮らしていたに違いない。
富も、地位も、子孫も十二分に満たされていた。
それが、天上の神々が禍を与えて以来、
戦闘と流血の絶えない日々となった。
これまで来られたのは、
屈強な意志の力があったからだろう。
しかし、なにをもってしても、
死んだ者たちを呼び戻すことはできない。
あなたの息子も、俺の友人も帰っては来ない。
この苦しみは、忘れることで克服するしかないんだ。

プリアモス　ゼウスの寵愛あつきアキレウス、
ヘクトルの遺体がこの陣屋の脇に
捨て置かれていることを思うと、
腰を下ろす気にさえならない。
どうか会わせてもらいたい、
そして遺体を引き取らせてほしい。

アキレウス　いまは腰を下ろしなさい。

プリアモス　どうか、アキレウス！

アキレウス　運命を背負った父親を
いつまでも立たせておきたくない。
ヘクトルは、あなたに返そう。
あなたが無事にここへ来られたのは、
神々に守られたからこそ。
でなければ、どんなに血の気の多い武将でも、

ひとりで俺の船陣へ上がり込んでくることなど
できるはずがない。
息子の亡骸（なきがら）を持ち帰るのは
あなたの運命だろう。
俺はその運命には逆らわない。
さあ、腰を下ろしてくれ。

プリアモス　ありがたい……。（と、座る）

アキレウス　しばらく待ってくれ、
遺体を運ばせる。

プリアモス　ああ……。
馬車に積んだ身の代を、おさめてもらいたい。

アキレウス、その場を離れ、
部隊の者に指示を出す。

アキレウス

（部隊の者／コロスに）客人の荷馬車より荷を降ろせ。
あすの朝、この荷馬車はヘクトルの遺体を乗せて運ぶ。
麻布二枚と、チュニカを残しておけ。
（別の者／コロスに）女たちはいるか。
ヘクトルの遺体を清めてほしい。
香油を塗り、麻布で包んで、チュニカを着せろ。
客人の目につかないところですませるように。
父親が息子の亡骸をみて心が傷まないよう、
できることはすべて手を尽くしてくれ。
パトロクロスよ、いまどこにいる？
ヘクトルをプリアモスに返すと知っても怒るなよ。
十分に高価な身の代を手に入れた。
すべておまえに届けてやる、
だから許せ。

アキレウス、プリアモスのところへ戻る。

アキレウス　遺体をお返しするための仕度をしてる。
夜が明けたら連れ帰るといい。
これは命令だ。

プリアモス　そうさせていただこう。

アキレウス　トロイア王におたずねしたい。

プリアモス　どのような？

アキレウス　夜が明けて、あなたが城に戻ってから、
葬儀をすべて終えるまでに、
どれだけの日数が必要だろう？

プリアモス　ヘクトルの葬儀を行ってよいと？

アキレウス　幾日休戦すべきか知っておきたい。

プリアモス　ありがたい……。

いまは薪(たきぎ)を集めるのに手間がかかる。
トロイアの者たちは戦争に怯えきって、
城の外へ出ようとしなくなった。
できるものなら九日間は宮中で弔い、
十日目に町の者たちとともに見送りたい。
そして十一日目には埋葬を……。
その頃には戦いが始まっているかもしれないが。

アキレウス　いや、そのとおり葬儀を進めてくれ。
そのあいだ俺は動かず、
ギリシア連合軍も船陣を出ることはない。
十一日間は休戦を約束する。

プリアモス　ありがたい……。

アキレウス　仕度ができたら、ヘクトルをここへ運ぶ。
少しでも休んでいかれるといい。

これまでろくに眠れもしなかっただろう。

プリアモス　ああ。

アキレウス、プリアモスから離れる。
やがて麻布に包まれたヘクトルの遺体。
プリアモス、遺体のもとへ。
遺体と対面するプリアモス。
プリアモス、ヘクトルを抱いて、泣く。
アキレウス、離れたところからそれを見ている。

コロス（ヘルメス）　老王よ、ご対面をすませたらご用心を。
いかにアキレウスが心を許そうと、ここは敵陣。
ほかの連中に見つかりますと厄介です。
命の保証はありません。

もしも捕まれば、城に残ったご家族が
また何倍もの身の代を払うことになりましょう。
なにしろ敵は戦争を終わらせたがっています。
悪いことは言いません。
闇夜に紛れてお逃げなさい。
ヘクトルとともに帰りたくば、
いますぐに。

プリアモス　……。

プリアモス、朝を待つことなく、
ヘクトルの亡骸とともに、アキレウスの船陣を出る。

第６場　『休戦』

トロイア城。スカイア門。

（歌）

コロス　トロイアの男も女も、
出て迎えよ。
薔薇色のこの暁に、
眠りについたその人は、
馬を馴らすその姿で、
よろこびをくれた人。

プリアモス、息子の亡骸を牽いて入城。
アンドロマケ、ヘクトルの遺体に歩み寄る。

アンドロマケ

（ヘクトルの顔を両手で包みながら）
あなたが守って来た
すべてのトロイア人が泣いています。
きょう、この頬に触れて涙する者は、
みな口を揃えて言うでしょう。
自分ほど悲しんでいる者はないと。
けれど、どうかわかってください。
あなたの妻と子どもほど、
悲嘆に押しつぶされている者はいません。
死んでしまったあなたがうらやましい。
いまのあなたはもう、
生きていたときのことなど、
なにも覚えていないかのよう。
わたしはあなたが残したこの子とともに、

運命を受け入れなければなりません。
それがどれほど残酷なものか、
きっとあなたはわかってるはず。
この子は大人になるまで生きのびることはないでしょう。
トロイアはもうすぐ破壊されてしまいます。
女たちは船に投げ込まれ、
野蛮な主人に仕えながら悲惨な最期を迎えるのです。
そうなってもなおギリシア人は、
戦争で死んだ家族の恨みを、わたしたちに向けるのです。
わたしは忘れません。
たとえこの戦争によって、
ヘクトルの名が永遠に残ることになっても、
わたしとこの子は、
あなたを奪った戦争をいつまでも呪います。

プリアモス、トロイアの群衆に語りかける。

プリアモス　トロイアの者たちよ、薪（たきぎ）を運べ。
城の外へ出ようとギリシア人が襲ってくることはない。
漆黒の船のなか、
アキレウスと約束を交わしてきた。
十二日目の朝が来るまで戦いはない。
トロイアを守って来た男のために、
炎を絶やすことなく弔うために、薪（たきぎ）を集めよ。
トロイアの者たちよ、戦争はない。
いまは休戦のときである。

祭壇に薪が積み上げられる。
ヘクトルの遺体が、祭壇の上に運ばれる。

点火。
立ち上る煙。

（挽歌）

コロス　戦場に立ち上る
倒れた仲間を焼く煙
気づいているのか　死んだ者は
人は　なぜに　戦う
気づかないのか　生きてる者は
人は　なぜに　戦う

エピローグ

物語の外にある物語として。

カサンドラ　イリアスの物語は、
ヘクトルの葬儀の場面で終わっています。
アキレウスの最期は描かれていません。
その数日後に迎える十年戦争の結末も、物語の外。
コロス　でもあと少しだけ、
終わりなき戦争の終わりを話しましょう……。
カサンドラ　トロイアの最期の日、
それまで一度も破られなかった城門のなかに、
ギリシア人たちが入って来たのです。
神をあざむく知恵を使って。

コロス　その知恵をはたらかせたのは、オデュッセウス。

カサンドラ　十年間、海岸に陣を張っていたギリシアの船が、
その日の朝、忽然と姿を消していたのです。
そして、千艘の船からできた要塞の代わりに、
海岸に巨大な木馬が残されていました。

コロス　継ぎ目ひとつない見事な木馬です。

カサンドラ　それを見つけたトロイア人は、
敵は終わりのない戦争に見切りをつけ、
女神へ捧げものをして逃げ去ったのだと思いました。

コロス　戦勝の喜びにわいたトロイア人は、
それがオデュッセウスの策略とは疑いませんでした。

カサンドラ　トロイア人は勝利の証しに、
巨大な木馬を城のなかへ運び入れました。
わたしは惨劇が迫っていることを感じて叫びました。

コロス　『それは破滅を導く木馬！
木馬に火をかけて！
敵の兵士をはらんでる！
今夜それを産み落とす！
流れる大海のごとき血によって、
トロイアが飲み尽くされてしまう！』

カサンドラ　聞く耳を持つ者はひとりとしていません。
巨大な木馬を美しく飾りつけ、
城内はいよいよ戦勝の祝いにわきたっていきます。
そのころ、沖合いに隠れていた千艘の黒船が、
再び海岸に戻っていました。
帰ったはずのギリシア連合軍は音もなく、
トロイア城めがけて迫っていました。
やがて、祝祭が途絶えると、

闇のなかでついに木馬が腹を割り、
ギリシアの兵士を産み落としたのです。
彼らが城門のかんぬきを開けると、
ギリシア兵が雪崩を打って襲って来ました。

コロス　闇に響く女たちの叫び声。
城を踏み荒らす敵の足音。
燃え上がる炎。
血の惨劇。
大虐殺。

カサンドラ　味方は武器を手にする間もなく、
女たちは逃げる仕度もできないうちに、
なすすべもなく殺されていきます。

コロス　プリアモスはゼウスの階段の下で刺殺。
ヘクトルの息子アステュアナクスは、

城の上から投げ落とされます。
オデュッセウスの命令でした。
そしてアンドロマケは奴隷として生け捕りにされます。
カサンドラ　わたしはアガメムノンの戦利品となり、
ほかの女たちと一緒にギリシアへ運ばれました。
すべては神々が望んだことなのです。
神々に愛されたトロイアの町が、
神をあざむく知恵によって滅びることも。
卑劣な策略を立てたオデュッセウスには、
このあと報いがあります。
あの男が故郷へ辿り着くまで、
十年間の過酷な旅が待っているのです。
コロス　死に絶える王家。
炎に包まれるトロイア。

苦しみに満ちた夜。
ゼウスの寵愛を受けた美しき町。
巨大な墓と化す城。
カサンドラ　さようなら、トロイア。
コロス　さようなら、幸せな時代。
さようなら。
町と人が永遠に消え去る。
英雄たちの名前が語り継がれる。
戦争の物語が語り継がれる。
それも神々が望んだこと。
カサンドラ　イリアスは、
ヘクトルの葬儀の場面で終わります。
アキレウスの最期は描かれていません。

アキレウスはまだ物語のただなかで、
ケイローンの槍を振り回している。
軍神アレスのように。

カサンドラ　人は　なぜに　戦う
怒り　栄光　運命
人は　なぜに　戦う
怒り　栄光　運命

（幕）